明治二十六年二月十五日發兌

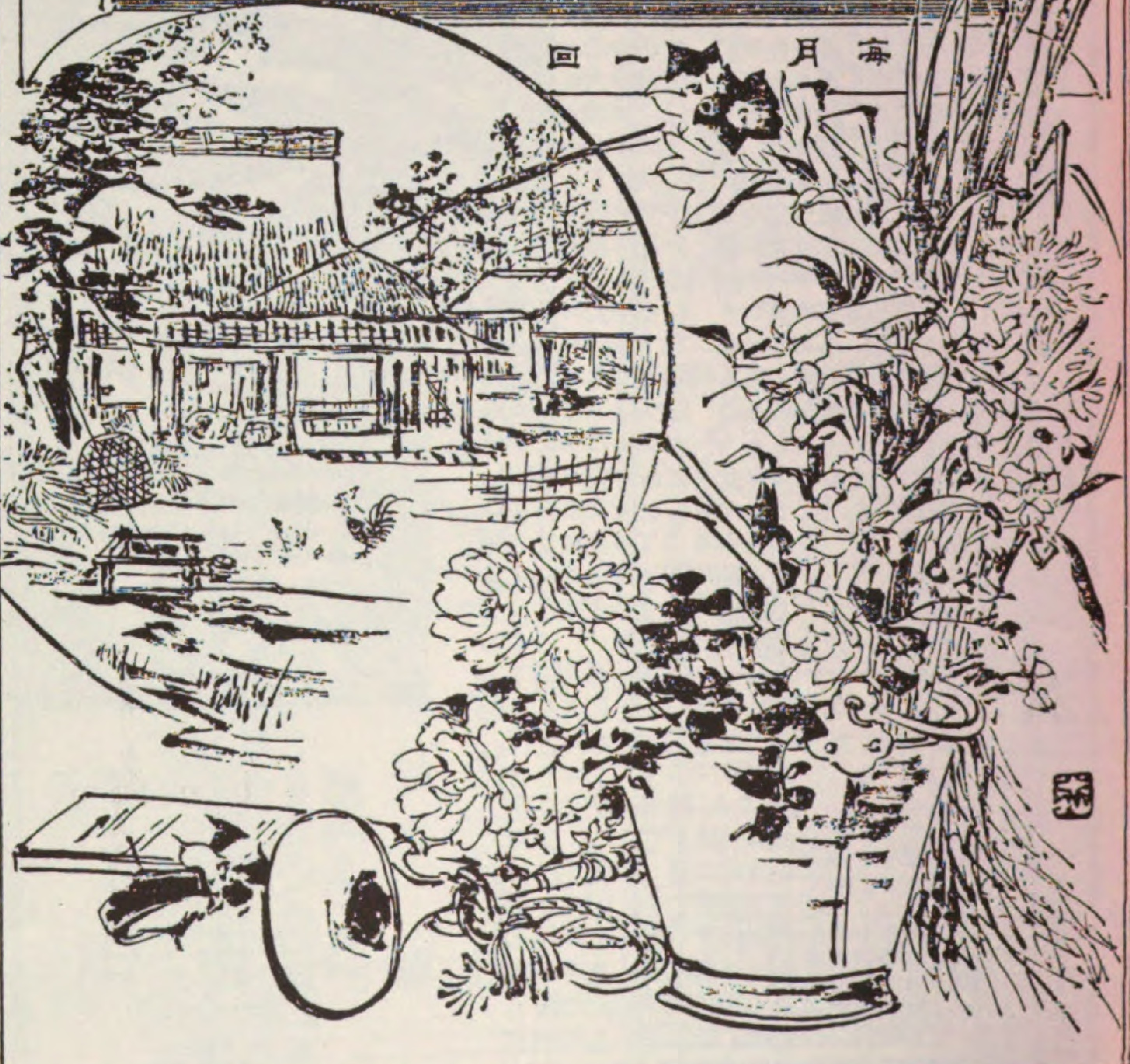
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月一回



第六號

人見一太郎著

第二之維新

廿三日發賣
定價金拾錢
郵税金二錢

第二之維新は革新の健兒也

維新の大業あつてより既に二十五年を過ぎ、天下また革新を望むの聲盛ならんとす。二十五年は夢の如くにして過ぎたり。謂ふこと勿れ、物質の進歩は最も冷淡なるものをも驚かしむと、謂ふことなかれ立憲の政治は既に布かれたりと。二十五年前維新の大功業を成就したるものは薩にあらず、長にあらず、元勳にもあらず、抑へんとして抑ゆべからず、遂に社會上の大膨脹となりし大精神にてありし也。廿五年前、割據の勢を破つて國民を作り、鎖國を破つて開國となし、保守を排して進歩となし、階級を破つて平等を立て、壓制を排して自由となさんとの大精神は澎湃として溢れて維新となりぬ。此の大精神老いたる乎、彼は生れて漸く四半世期を過ぎたり。此の大精神疲れたる乎、彼は未だ疲るゝ程に多くの大功業をなさず。此の大精神を殺さんとするものある乎、世は革新派、非革新派を見んとするに至りぬ。今日の事態正に此の如し、此の如き時に當つて『第二の維新』出づ。『第二之維新』何故に出づべき乎。之を解く一言にして足れり、曰く『改革は中止するものにあらず』

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌定價表

一冊	前五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾三錢
十二冊	金五拾錢	五拾六錢

（地方郵税共）

廣告料　二拾四字行數回數に付割引無　八錢　本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割増しの事

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
東京市京橋區日吉町四番地
發行所　家庭雜誌社

明治二十六年二月十五日發兌
家庭雜誌第六號

目錄



家庭雜誌第六號

(明治二十六年二月十五日發兌)

社説

家庭の談話



家庭の敎育に最も關係あるものは、父母兄弟親子間の談話なりとす。

談話は、家庭の空氣也。小兒は此空氣の中に包れて生存し、此空氣を呼吸して成長す。小兒を惡人となすと、善人となすと、凡人となすと、英雄となすと、總て此談話の性質如何に依りて定まるなり。

談話は心の寫眞也。人によりて談話の異なるは、人によりて面の同じからざるか如し。或る家庭に於ては、父母兄弟の前に卑猥の談話を爲して、憚からざるあり、或る家庭の談話には、男女の品定めを爲すあり、或る家庭には宗敎信仰の事のみを話すあり、或る家庭は、政談のみを以て滿たされ、或る家庭は俳優談を以て滿され、或る家庭は他人の惡口のみを以て滿たされ、或る家庭は琴三味線等音樂歌謠の談話に滿され、或る家庭は、書畫生花大和歌の談話を以て滿され、談話の趣き一々同しからす。然れとも何れの家庭にも必す談話の主となるものあり、開口第一之に初まり、談話の結局之に終るものあるなり。家庭の人は、老人も壯年も、父も母も、兄も姉も總て知らす識らす此の主たる談話に敎訓せられ、或は日々毒を吸ひて、心中に病の生するを知らす、心の命の縮まるを知らず、特にその頭腦の柔

かなる嫩芽の如く、その精神の清白なる白紙の如き小兒に於ては、最も談話の感化を受るもの也。親は兒の腐されたる鷄卵を食ひ、不熟の菓を喰ふを見ては之を制止するにあらすや、是れ毒を身に及ぼすを恐るれは也。肉の病は人その恐るへきを知り、心の病は人その如何なる大病難症、肺病、心臟病、癩病にも相當する大病難症をも、平氣に見るは何ぞや。

肉と心とは何れか大切なるや、心の肉より大切なるは、誰れも能く知る所也、而して獨り肉に病あるを知りて心に病あるを知らさるは輕重を知らさるの至りと謂ふ可し。

小兒が第一に耳より思想を入れて、心を開發するは、家庭の談話なり。家庭の談話は、總て白紙の如き小兒の心に映するなり。若し母、姉と與に俳優の談を爲せば、その談は直に小兒の腦中の白紙にうつり、團十郎と談せば、團十郎は小き耳より墨黑々と白紙に描かるゝなり、菊五郎といふ時も然り、福助といふも然り、左團次といふも然り、雁次郎といふも然り。清潔なる談話、家に滿ては、小兒の心は、常に清潔に、卑猥なる談話、家に起れは、小兒の清き心は直に汚かる、其反應の速かにして、妙にして、且つ的面なるは實に驚く可きものあるなり。故に家庭に於て最も謹むへきは談話也。特に小兒ある人に於ては、一言一句も談話を謹まさる可らす。余か知れる人に鸚鵡を養へる家あり、その家の僕に少し智惠の不足せる新藏といへるものあり、其家の旦那甚た癇癪持にて、時々新藏の落度を責め『馬鹿新藏』『馬鹿新藏』と罵れり、然るに又た主人の父に當る故人の朋友にて、何の新藏と稱する白髮翁あり、此の白髮翁は、主人の父とも師とも仰く人にして、此人に遇ふ毎に癇癪持の主人も、餘程穩和になる程なりき。或る日此白髮翁は、用事ありて、主人を訪問し、寒暖の挨拶濟みて、白髮翁は床の前に推し上け

られ、横風に構へてありしが、忽ち隣室より『馬鹿新藏』と呼ぶものあり、白髪翁は、蒼き面を赤くせり、主人は黒き面を赤くせり。再たひ『馬鹿新藏』と呼べり。三たひ『馬鹿新藏』と呼べり。客は憮然として、起ち、隣室に於て拙者を侮辱せらるゝは何事ぞ、定めて御主人の御指圖なるへし、案外千萬なりとて、禮もせすして、玄關に趣きたり。主人は、大に驚き、是れ人の呼ぶにあらすして、鳥の聲なるを辨すれとも、白髪翁は猶も顏を赤くして、一切聞き入れす、氣轉ある妻君幸に鸚鵡と與に玄關に入り來りたるを以て、客の心解け、後は主客一笑に附したりと。鸚鵡すら斯の如し、まして人間に於ては、最も謹ますんはある可らす。

談話中、最も大なる感化力を小兒に與ゆるものは、親の寢話也。或る親は譯もなき昔話を爲し、或るものは軍話を爲し、或るものは己れの若年の時出遇ひたる話を爲す。此の寢物語は最も小兒の喜んで聞く所にして、小兒の最も珍らしとして耳を傾くるものなれは、敎訓を物語の中に混して、それとなく自然に小兒を敎育するは殆と藥を饅頭菓子の間に混して小兒に喰はしむるが如し、小兒の歡樂の中に、小兒の心を養ふを得るは之を以て最も無害なる良法なりとす。

軍話は善し、是れ小兒の精神を活潑ならしむ、勇武の國民を作る國家は、先つ軍話を爲すの家庭を有せさる可らす、勇武なる未來の將軍は、先つ軍話を爲すの親を有せさる可らす。英雄の逸事、聖人善人の善德、惡人の末路、放蕩者の最後、大飲者の不幸等は總て寢物語となす可し。親の小兒時代及小兒時代の風俗、政治等を物語るは、小兒に最近の歷史的知識を與ゆるものにして、此種子は他日大なる樹木となりて、美なる花を開き、甘き菓を結ふ可し、決して面倒なりとして寢物語を廢する勿れ。

或る親は、一も寢物語とすへきものを知らさるあり、

斯の如き人は、軍話、宗敎談又は英雄の傳記など自ら學問して、之を子に敎へさる可らす。乳を子に與ゆる親は、力めて滋養物を喰ふて、身を養ふにあらすや、精神の乳を吸ふの子を持てる親豈に自ら精神の滋養物を喰はすして可ならんや。

論　說

小學生徒

鐵斧生

或る麗はしき夏の日の夕暮、東京某街を歩する時、卷烟草をふかしつゝ濶歩する一人の小學生徒を見たり。其遙か後ろより書物を披き見つゝ行く眼鏡をかけたる一人の小學生徒を見たり。

二人に對して共に一種不可言の感起りたり。我國の小學生徒幾多。渠等は何を學ぶや。渠等は何に依りて志氣昂然たるや。學業の花は所謂文明の風のために渠等の周邊に滿開せり。敎育の道具立は美事に出來居れり。然れとも、然れとも、然れとも、果して全國の小學生徒は敎育せられつゝあるや。

邦家は人民の反影なり。人民は兒童の生長したる者なり。子は人の父なり。父は子の子なり。小學生徒は後日の國民なり。

新時代の事業行動は舊信仰舊思想に依りて爲し得へきに非す。信仰なき國民は存生する能はす。邦家を形成する能はす。小學生徒をして第二の國民たり未來の邦家たり時の經過と伴て宇宙に存在せしむるに足る根本の敎育あるや。

所謂敎育先生曰く「修身課書の完全なるを見ずや、德育の發達を見ずや、倫常、節義、智勇、云々」。

倫常とは何ぞや。智勇とは何ぞや。抽象的捉雲の信仰は現今未來の社會に到底容れらるへき物に非す。此物に依りて自家の安心立命の地を作る國民の憐むへき事幾許ぞや。小學生徒を敎授するを以て滿足すれは論なし、敎育するとなれは少しく注意せさるへからす。斯くてこそ敎育は國家之大本なれ。

徒らに敎へ徒らに授け第二の國民を擧けて信念なき民族と化し去らしむ。天眞なる千萬の兒童を所謂る小學生徒に製造す。隨分なる大製造事業。

論客難して曰く「新敎育を認め乍ら新思想の發育足らずとは片腹痛し。新なる信仰は果して如何にして養ふへきや。」

捉雲倫理の講釋を廢して根本の敎育を爲さゝるへからす。泰西國民の少年等か科學算數の間に埋沒して眞理を研究し水の如く靜かに石の如く冷なる外見あるに拘はらす内心は火の如く燃へ居るは何そや。渠等は實に倫常以上の一種の一冊の書を有せり。

借問す、我國の小學生徒にして日曜日の美なる朝に一冊の書を携へて一種の建築に入り行く者果して幾人か有る。

家計豫算

自助生

事前に定まれば疚しからず、家計に豫算あれば大晦日に餘閑あるべし、

家を理むるは猶國を治むるが如きなり、豫算の家計に須要なるは猶其國に須要なるが如し、國會が年々紛擾して或は解散せられ或は停止せらるゝもの皆是れ豫算の爭なるを思ひ看よ。如何に其大切なるかを知り得て自ら餘りあらん

航路の定まらざる航海は安全の港入を期し難し、豫算立たさる家計は時に顚覆の憂なきを保せざるべし、然るを世人の多くが之を忽諸に付する者は何ぞや、大晦日が恐惶の日と定まりたる所以は他にあらじ、

請ふ吾人をして吾人の家計豫算法を説かしめよ、

一年の計は元日に在り、朝暾凞々新に幸福なる春を齎て東天より來るの時、此時よりして須らく新たなる歲計年度に入り、以て其幸福なる春を安らかに大晦日まで持續することをつとむべし、從來のならひとして一年の惣まくりは常に大晦日に於てすることなれば、家計の年度も歲と共に更むるを便利なりとす、

さて斯くの如くに歲華と共に家計の年度をも更めんに

は、之が豫算案は勢前年の大晦日までに調成し置かざるを得ず、

而して之を調製するには第一に入を量て出すをなすと云へる古語の如く、まづ一年の歳入を豫算し、歳入の割合に從ひてそれ〳〵に歳出の割合をも定め、夫若くは妻より原案を出し夫妻會議に於てよく〳〵討議の末之を決定すべし、此の豫算會はたとひ一日を要し二日を要し若くは三日四日を要するとも惜しからぬ事なり充分愼重丁寧に議すべし、此會議の愼重丁寧なるは其愼重丁寧なる程愈異日實際支出の際に出納局長を細心せしむるの効あり、

此會議に於ては兩個の議員は宜しく全然批評家の位地に立ちて充分に審査し、生産的の費額は成るべく多くし、不生産的の費額は成るべく節減を主とすべしと雖餘りに理論の際にのみ節減して、實行の日には却て幾多の事後承諾經費を生ずる如き事ありては、折角の豫算會議も徒勞に屬すべし、よく注意すべきなり、

而して其豫算案に上るべき費目は、

第一、歳入　歳入は人に因りて異るものなればこゝに其目を掲け難し、然り其目をは掲け難しと雖、歳入ありて始めて歳出をなし得べきものなれば其豫め知り得べき者は勿論、其收入額のたしかに知れ難きものも充分想像してなりと之を豫算するを要す、是れ一は以て其收入の手段をたしかめ得べく、一は以て其勤勉力を増すを得べし、

第二、歳出　歳出を大別すれば大畧下の如し、

(一)興産費　興産費即ち資本は以て歳入を作る所以なり、最も多額を要すべし、去れどこれもと其職業に從ふものにして、心身の勞力を資本とする人の如き全く之を要せざるあり、故に今こゝに叙せず、とはいへ心身の勞力を資本とする人と雖同時に其剩餘を此の用途に充つべきは勿論なりとす、

(二)生活費　生活費とは、曰く被服費、曰く食費、曰く居住費、曰く雜費、

被服費は豫め家族の人數に應じて春衣幾領秋衣幾領夏衣冬衣幾領內新調幾領洗ひ張り何程帽子何程靴何程等

を算し、以て其費額を定むべし、固より時價に高下あれば必ずしも豫算通りには行かざるべしと雖、斯し置けば、年々の例にもなり、知らす識らすの中に奢侈に流るゝ事も少なかるべし、又垢つき汚れたる衣を健康に害あるまで着るにも及はざるなり、

●食費は米何程菜何程牛肉何程醬油何程砂糖何程菓子何程茶何程コフィー何程に至るまで之を豫算し置くべし、而して其品は寒暑に應じ、身心の健康に最も適當なるものを撰むを要す、

●居住費は家賃自宅なれば修繕費家具費等を見積るなり

●雜費は僕婢の給料薪炭油筆墨紙其他、

斯くそれ〳〵に大略豫算し置く時は大に浪費を省くべく、又一年の收支明に其記性に屆け置かるゝを以て働くにも張り合ひあり、遊樂するにも安心なり、

(三)義務費　國家に拂ふべき租稅なり、宗敎信者としては敎會費なり、其他此類のもの數多あるべし、

(四)子女敎育費　既に其子女あるものは勿論未た子女なきものも、豫め未來の子女の爲に年々之を積み置くべし子女が一個の國民となるに資し得べきたけを、人は貨財を以て其兒孫に讓るよりは貨財を得へき資格となして讓るの恩惠なるに如かず、

(五)社交費及ひ慰勞費　新年を慶び、クリスマスを祝ひ、誕生節を賀し、集會に臨み、人を招き、人に招かれ、公共的の運動をなし、春は花を見、夏は旅行し、芝居を觀、海水に浴し、書物を買ひ、美術品を求むる等、皆其額を豫定し置くを要す、蓋し人は樂みなかるべからざるなり、適宜に樂めば樂みは實に間接なる勞力の資本となるべし、

(六)慈善費　慈善も或る意味に於ては社會に立つものゝ義務の如し、正しき不幸者を惠むは亦人類の宜しく爲すへき事の一なり、特に婦人は其多感多情の性自ら慈善を好む、唯慈善は其目的及ひ手續の正しきと、自家の分に應せるとを好しとするなり、宜しく其分限に應してそれ〳〵慈善費を豫定し置くへし、

(七)豫備費　世界の開化は貯蓄の効果なり、人に恒産あるは世に恒久の平和ある所以なり、加之老少不

常の世のならひには、昨日彌生の花と榮へし身も今日は秋の木の葉と零落るゝは期せず、之が備をなすものは唯豫備費あり、

豫備費は須らく第一豫備費第二豫備費となし置くべし

第一豫備費は基本資産を作るに充て永久の豫備となすなり、則ち日々月々或は年々に貯金し若くは公債證書土地確かなる株券等を買ひ置くべし、

第二豫備費は不次の用に充るものにして、疾病其他臨時の用意とし、此の費額に限り他の各項に流用するを許すべし、去れとも普通の場合に流用する時は豫算臨時會議の承諾を經るやう其會計法に規定し置くこと便なり、

以上列記したる七項は世を中等に暮す人を標的として說きたるものなれば、人に因り家に因りて、項目に增減あり費額に斟酌あるべきは固なり、又中等の生計を營むものと雖右の七項にて其費目を網羅したりと云ふにあらず、唯其一二例を示せしに過ざれば、人々宜しく自家に相應せる費目を定むるを要す、而して此の各費目中出納官の熟練によりて剩餘金を生ぜし時は假りに之を第二豫備費に繰込み置き、其流用の必要なきに及ひ、一定の月日を經て之を其第一豫備費に轉入すべし、然らされば之を興產費に投するも可なり、唯第一豫備費を以て其投機的興產費に混ずる如きは頗る危險なる事にして、時に或は營業の顚覆は資產の顚覆となることあるべし、

又この豫算額は各項何れも之を各自に割りつけ置くを可とす、

右の如くにして家計の豫算定まらん乎、直に會計簿を製して、之を一家の出納局長に預け、細君若し之が出納局長の任に當らば、細君は宜しく先づ會計簿の開卷第一に此の豫算決議表を揭ぐべし、而して其會計簿は、最も簡便にして一日は一日の小計成り、一月は一月の小計成り、年末に至れは出納瞭然過不足一目して知る



べきものなるを要す、此目的に由て製すへき會計簿は余別に考案あり、若し社會にして之を需用せは余は之を公示するを吝まざるべし、

要するに此の會計簿の主掌者は宜しく毎月末に其決算を報告し、夫妻會議に於て精細に之を豫算表と對照して按査すべし、歳入にして豫算額より不足せば收入官を責めよ、歳出にして豫算額を超過せば支拂官を戒めよ、而して如何なる塲合に於ても決して公債を募ること勿れ、此くの如くにして相省戒し行かば、資産の覆滅を欲するも亦得べからさるなり、一家幸福の泉はそれ沸躍して涌かん、

科學

二人の大彫像師

獨逸國とかの大醫病に罹りて將に死せんとするとき、其の床の左右に集まり、我が爲めには良師を失ひ、國の爲めには良醫を失ふことを悲しめる、數多の醫師を顧みて、「諸子何をか憂ひ玉ふ、余は余の亡後に一人の大醫を殘し置くべし、此の大醫だにあらば、余はなくとも悲しむには足らざるべし」と云ひ、不審かる人々の顔を見て「怪しみ玉ふな、其の大醫は諸君も常に聞き及はれたるなるべし、其の名は水」と云ひけるとかや。水程不思議なるものはなし、されど水が如何なる故に誰も及はぬ良醫なるかを說くは別に折あるべし。余は水及ひ水の變形なる氷を以て世界の二大彫像師となし、其の事に付き少しく說き出し見む。

此の二つの者が何故に二大彫像師の名を得たるかを知らんとせは、先づ彫像師とは何事をなすものなるかを考へざるべからず。諸君若し彫像師の庭に足を入れられなば、諸君は其所に花崗石。大理石、其他の大なる石材の種々なる形にあらでなしせられたるものあるを見ん。夫より彫像師の仕事場に至れば、立派なる彫像の其處此處に安置せらるゝを見、而して必ず彫像師が庭にありし石材を取つて生物と見まかう計りの石像を彫みたることを知らむ。其の石像の中には悲むが如く

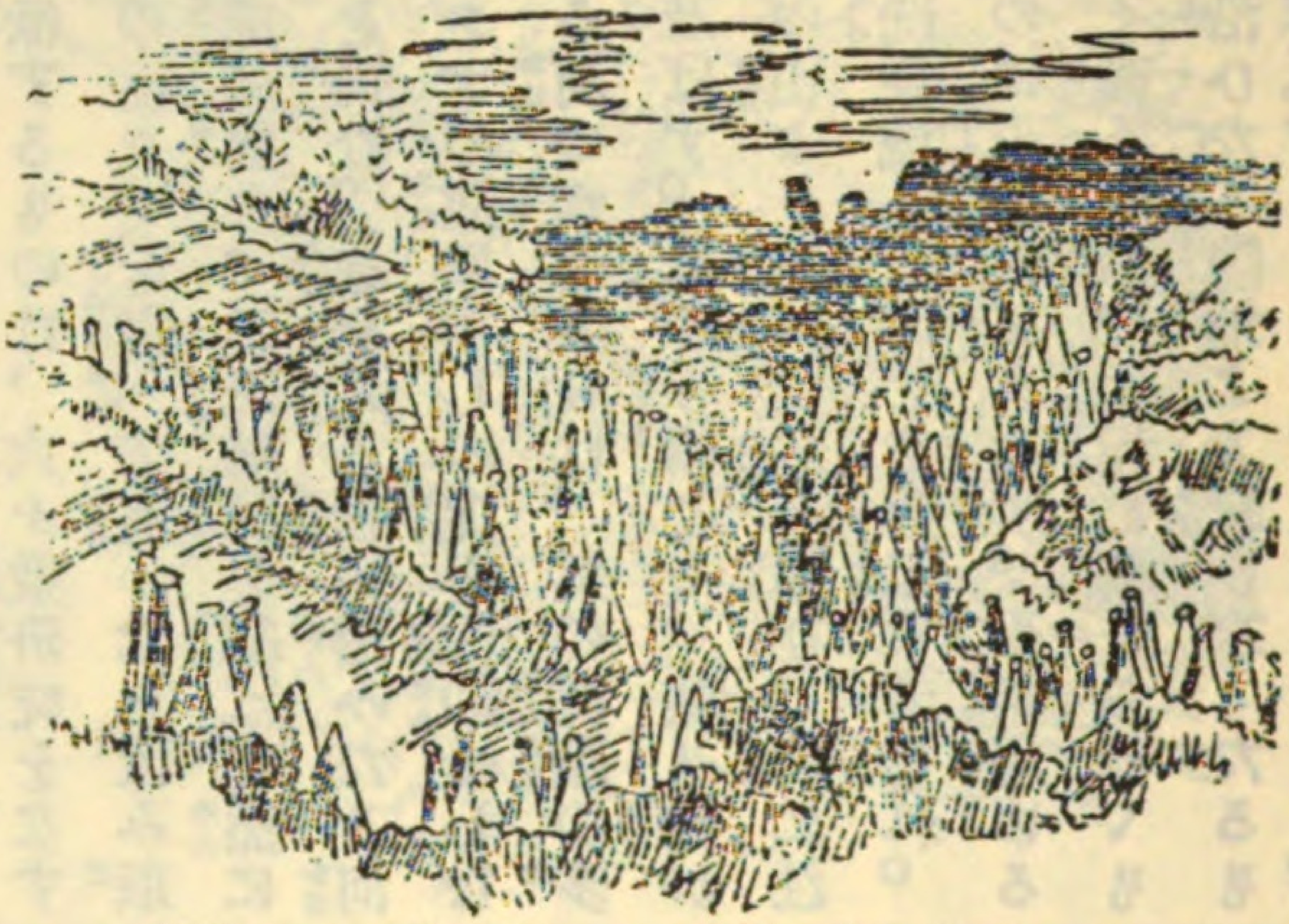
見ゆるもの、考ふるか如く、喜ぶが如く、苦痛に堪へざるもの丶如く、靜かに息ふが如く、細かに一擧一動を寫し得たるものあらむ。此等の歷史は如何にして彼の形なき石材より作り出されたる乎。云ふまでもなし、彫像師の鑿を以て作られたり。此處より一片を取り、彼處に條を作り、一と打ち二た打の間に格好を作り、丁寧に「磨き」をかけ、遂に生物の形を成す。

彫像師が鑿を以てなすと同じく水と氷とは、其の流る丶所ろ地球の表面を切り、山を作り、谷を作り、峻しき坂を作り、なだれたる路を作り、美はしき景色を作り、地球に美を與ふ。勿論、大陸、高山の如きものは多く地震によつて出で來りたるものなれども、此等は荒でなしに比すべきものとして說かず、地震の荒でなしありたる上、千變萬化の形を作り出すは水と氷との力なれば此の二つを大彫像師と呼ぶは理あることとなるべし。

郊外に逍遙するのとき、或は鐵道にて旅行するの時、目を留めて四邊の光景を眺め見よ。山を過ぎ谷を過ぎ、巖の間の狹き路を過ぎ、攀づると能はざる斷崖の下を過ぐれば、數里の間目に觸る丶ものは天と地とのみなる平原に出づ。更に海濱に出づれば、洞あり、穴あり、墜道あり。此等目に觸る所ろのものは皆な水のなせる業に外ならず。日一日、年一年、何事もなきか如くに見へなから、此の精勵なる彫像師は一片一片、一粒一粒を削ぎ取る。

軟かき地に雨の落つるときは、小さく圓き穴穿たれ、雨滴此に集まり、砂の間をくゞり地中に沈み入ることは誰しも知る所ろならんが、圖に示せる如き不思議にも美はしき柱が、全く此の如くして、雨か地を打ち、地に沈む爲めに出で來りたるものなりとは容易に信ずる能はざるべし、此は澳地利國、チロル州、ボーチエン市の近傍にある土柱なり、此の柱の立てる處は、始め、粘土と石との混りたる地なりき。雨此に落ちて、地ゆるみ、日日之を乾して割れ目を生し、雨再たひ來つて、地更にゆるみ、漸次泥土を下の谷に流し去れり。粘土の中に大なる石其の數多く、埋まり居て、雨も之を貫

きて地に入る能はず、其の周圍の土を總て流し去り、かくて石の冠を戴ける粘土の柱、丈を較ぶる如く、列を作らんとするか如き觀をなして衝つ立てり。



雨が地球表面の狀態を變ずる尙ほ一の方法は、崖の上の軟かき地よりくゞり込み、地中にて仕事をなし、土と混して泥となり時を待つて山崩の大仕事をなすにあり。

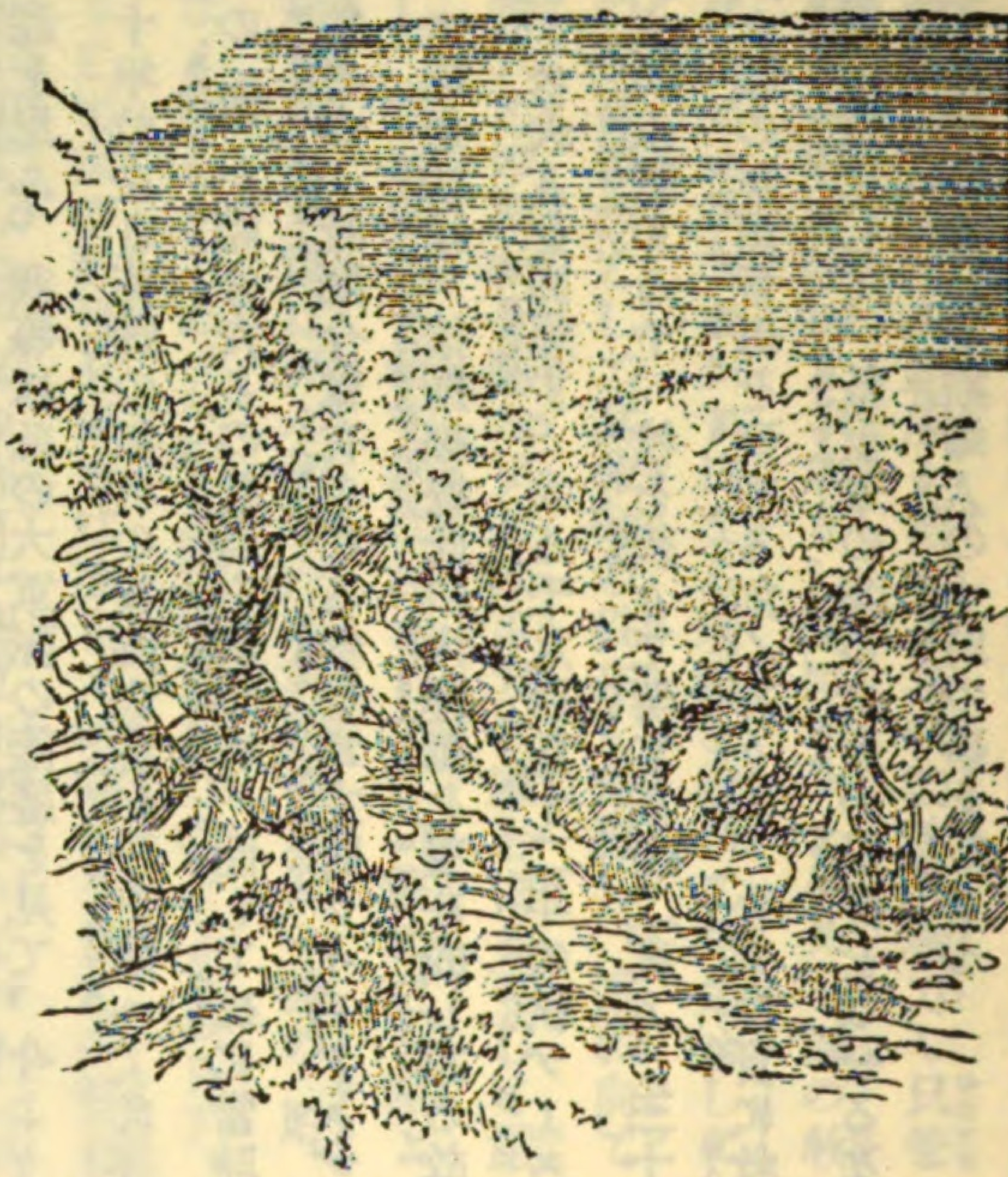
されど此等は稀にある所ろにして、水が最も忙はしく彫刻の業をなすは、雨となつて降りたるもの、集まつて小川となり、小川また合して大河となりたる時にあり。道路或は公園の中、地の少しく傾むきたる場所を擇び、降雨の際に如何なることを起るかを觀よ。最初に、雨滴走つて、あらゆる小さき穴に集まり、溢れて、車の轍を傳ひ低き方へと流れ行く。かゝる間に彼方よりもまた、細き流れ、蚯蚓の如くに匍ひ來り、低き地に集まり大なる流れとなつて溝に注き入る。道路或は公園にて起る此の如き事件は、雨の日には、世界中到る處に起る。最も多くの雨を受くるは山の頂にて、其の雨は無數の細流となり坂路を走り下り、走り下りつゝ相ひ合し、走り下りては諸方より流れ來るものを合せ、小川に注き入り、遂に大なる流れに合し、河と稱せらる。此の河、凹みたる地に湛へて湖水となり、更に湖水の一滴に低き地を求めて流れ出で、新なる河となり、行く〳〵細流を合せて海に入る。我國にて此の如きものゝ中の大なるものを數へ見なば石狩川、最上川、利根川、信濃河や最も大ならん、木曾川、筑後河、飛鳥川は名高き川なれど、淵瀨定まらねばこゝには數へ難からん。世界にて第一の河は、降つて集まるアメリカのミスシッピー河にやわら

ん。臥て底を見る天の川の大さは測りたるものなければ未だ知られず。

夫は扨て置き、此の如きものか、如何なる彫像術をかなす。之を知らんと欲するものは、六ヶ敷研究をなす迄もなし、只だ一つのコップを携へて河の水を汲み取り來り、之を靜なる處に置き、二三時間を經ば自然に此の間に答ふることを得む。底を見る程に澄みたる河の水とても、必すコップの底に少しの泥を沈澱せしむべし若しまた濁りたる河の水なりせは、其の沈澱の多量なることは云ふに及ばず。此の一事こそ、最も確かに、細流小川、大河の山より流れ、谷を傳ひ、海に注ぐ間に陸地の部分を洗ひ流し行くことを示す者なれ。かく河水の奪去るものは土のみにあらす。平常用ゆる鐵瓶の底に、皮の如く凝り着く、水垢と稱せらるゝものは、水が其の道に沿ひたる陸地より奪ひ來りたるものにて、多くは炭化石灰なり。ビスコップと云へる學者、獨逸國ライン川が年々其の水に溶して海に注き込む炭化石灰の量を算して三千三百二十億萬の牡蠣殼を作るを得べしと云へり。さればライン河は毎年炭化石灰のみにても、淺草公園一杯に積み立て凌雲閣の高さに達するよりも更に多量の陸地を削り取つゝある也。」此の如き多量の土地を、或は泥となし、或は溶解せしめて何處にか持ち去るとせは、取り去られたる後には、何處にか、大なる洞穴か或は裂け目を生せさるべからず。暫らく、此の裂け目の生する摸樣を語り、大彫刻師か如何に其の鑿を用ゆるかを語らん。諸君は嘗て山腹を攀ち上られたることあるか、或は涓々たる細流に沿ふて谿間を逆りたることある乎。若しあらは、必ず、大小無數の滑石、水流を點綴し、岩石の彼處此處に散在するを見しならん。登るに從つて道險しくなり行き、道險しきに從つて岩の形益々險怪になり行くを見しならん。

此の谿路の歷史は水の彫刻術に關して敎ゆる所ろ甚だ多し、今こそ此の如き大なるものなれど、始めには僅かに、糸より細き雨水の流れ行く小溝に過ぎざりき。次第／＼、此の細流が土を流し行くにつれて、小溝は

深くなり、廣くなり、水涸れ、日乾かしたる後また水流れ、土は其の度毎に脆くなりて崩れぬ。秋の雨未だ乾かさるに冬來り、氷と霜とはまた土を脆くし、裂け



目を大にし、水は溢るゝ如く流れ來り此割れたる土と岩とを洗ひ去りぬ。岩は水に押され轉々として下り、互に撃ち磨き圓き滑石となり、水勢の弱き處に沈み、其の碎けたる部分は砂となりて押し流されぬ。時を經て最の小溝は谿となり、人の通ふべき道ある程に廣かり、巖には苔生ひ、草木其の岸に根を下しぬ。大彫像師は此の如く、小山の半腹に美はしき小天地を彫り出せり。（つゞく）

史談

故ブース夫人の少かりし時（上）

救世軍の母

軍隊に象とりたる組織を以て救濟の目的を行ふ英國のサルヴエーシヨンアーミー所謂救世軍は、創設以來一世紀の四分一を經て今や驚く可き大勢力となりぬ。此軍隊組織の初め其意匠の新奇なるより多數の世人に野卑と云はれ、何人も其の短命を豫言せしか、今や四千二百九十餘隊の兵士は列國に散布し、一萬六百餘名の將校指揮を掌どり、其軍旗は三十五ヶ國に飜れり。

方今社會救濟的運動少なからずと雖ども、大凡そ下層社會の救濟事業に大功あるは、實に救世軍を以て第一に置かざる可からず。ナイルの長江を見てはニアンザの湖を思ふ。我等は此の大軍隊の隆盛を見て、今より三十年前左る英國の無名の牧師夫妻が手を攜へて此運動の源を開きたるの當時を回想す。而して殊に當時は無名の一牧師今は有名なる救世軍主將ウイリアムブース氏を扶け、拮据經營此の大運動を養ひ成したる故ブース夫人を回想す。去る千八百九十二年の秋ブース夫人の永眠するや、棺を繞りて哭する者二萬人、三十六ケ國の隊員皆母を喪する如くありき。夫人は實に救世軍の母にして、救世軍の爲めに産の劬勞をなせるなり。此處に少しく斯婦人の少時の事を記さん。

ブース夫人は名をカザリンと呼びぬ。母はミルウアルド家の女にて、幼なく母を失ひ、父は冷淡叔母は苛刻の愛なき家庭に育ちしか、極めて志高く氣力丈夫なる婦人なりしといへり。ブース夫人の母の猶乙女なりし時、門地ある一紳士深く孃を戀ひて結婚の申込をなし、孃も諾し、家族も諾しけるに、結婚式の日已に定まり今は式を擧ぐることゝなりたる其時、偶然の事によりて其男子は思ひしよりは卑き男子なる證跡の露はれぬ。ミルウアルド孃は深く〳〵其情人を愛したれ共、此事を知るや驚く可き果斷を以て一瞬時の猶豫もなく直ちに其約を斷てり。情人は失望して發狂し、ミルウアルド孃は十六週間生死の間を往來する大病に罹りし



（ブース夫人）

程の結果を生じたるも、孃は心の疵を押さへて此處置に出でたり。孃の苦痛は非常なりき。非常の苦痛よりして孃は愈心を宗教の上にむけ、熱心のメソヂスト教會員となり、舞踏服を截ち、身の装飾を棄てゝ只管信仰の一事に熱せり。斯りし間に、メソヂスト派の牧師ジョンマクフオルド氏なる者孃を戀ひて求婚せしに孃の父は憤然として其牧師の往來を謝絶し、孃に向ては情人との契約を斷たずんば直ちに家を去る可しと嚴命し、孃が猶固く執て從はざりしより、終に之を家より追ひ出し、孃は殆んど着たる衣物のまゝ一錢の貯もなく家を出でぬ。しかも孃は心を更ふ可くもあらず、さりとて父の許可を得では決して結婚すまじとの誓を獨り心になしぬ。父の許可一時は到底望みなかりしが孃の耐忍強き數ケ月の苦辛を經て終に一たびは其女を家より追ひし父より結婚の許諾を得たり。斯くてミルファルド孃はマクフオルド夫人となり、夫妻の間に生れたる女子は即ち後來のブース夫人なりし。

ブース夫人は極々幼少の時より母の侶伴となり、其秘密を與かり聞けり。十六の時米國に渡り去りし其兄弟の外、ブース夫人は遊仲間と云ふものもなく、其頃子供の育て方極めて一般に良からざりしかば、ブース夫人の母は女を惡習に染ませじと家より出すこと殆どなかりき。またマクフオルド家族にては小説を讀むことを嚴禁し、佛蘭西語もいたく嫌はれたり。ブース夫人の母の謂へらく、小説は眞實あらず、佛語を知るは不信猥陋の小説的文學を知るの緒なりと。夫人は三歳より聖書を讀むことを敎へられ、五歳になりし時は低き足凳の上にのり母の傍に立ちて聖書を讀むを常とし、十二歳にならざりし間に早くも新舊約書を八回もくりかへし讀みぬ。斯くブース夫人は謹嚴質直の家庭の敎訓を受けたり。

「人形有たぬ女兒は子供なき母の如し、有り得べから

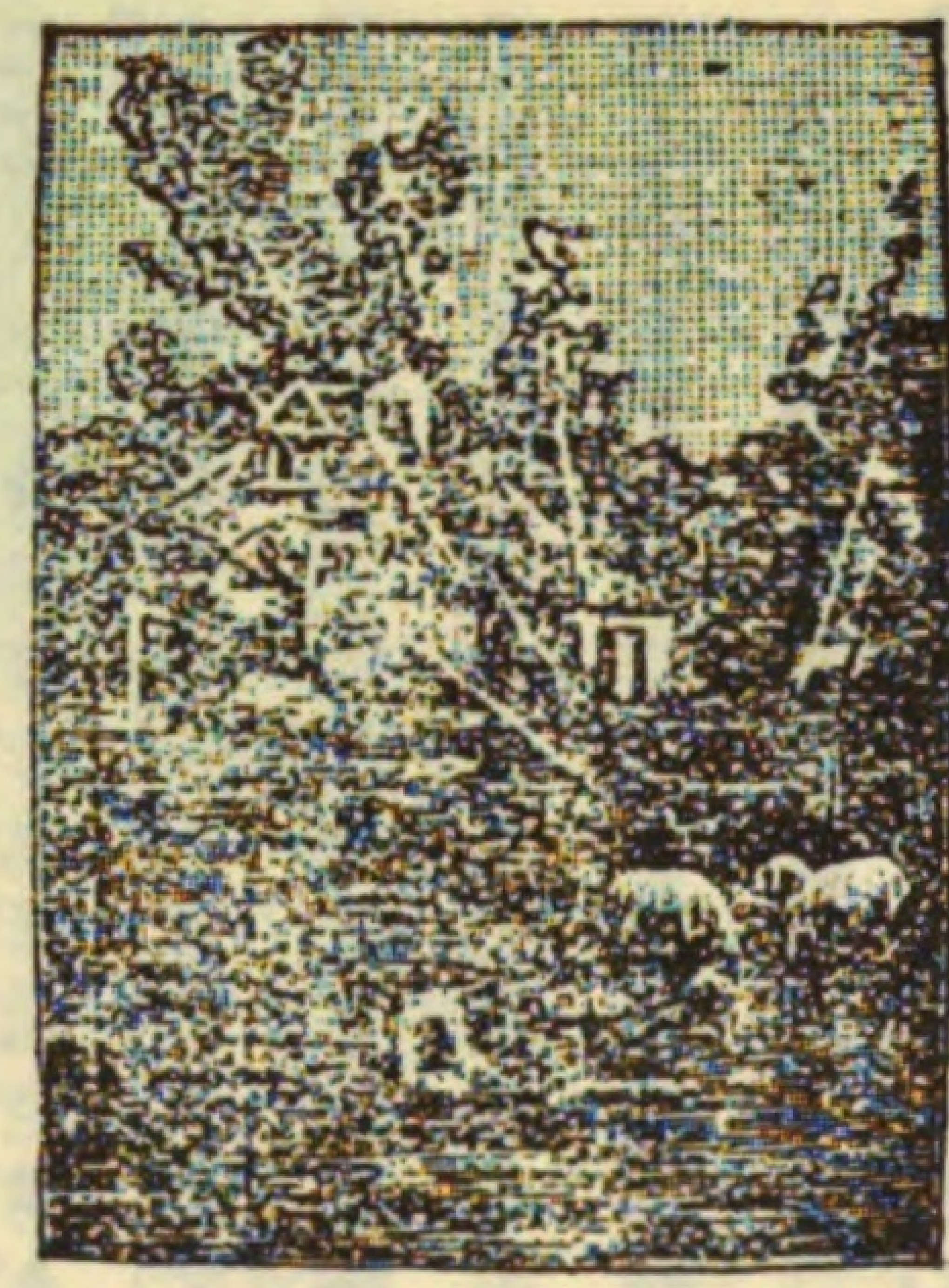
ぬことなり」と佛國のユーゴ翁は云はれたり。聖書を日課とし、母を友とし、家を社會とし、佛蘭西語は敎へられず、小說は禁ぜられたるブース夫人と雖とも、如何ぞ人形を愛せざらん、實に子供を愛する母の將來を人形に於て現はせるなり。而して其人形家族を愛するの篤ふして其戯れ遊の實地的なる、ブース夫人に在ては人形遊は人形遊にあらずして一個の家庭敎育の如く、之に食はせ之に衣せしめ之を眠らし之と共に祈禱し、暇日には眞面目になり俯きになりて人形の衣裳を縫ふに餘念なかりし。かゝる夫人は斯くして糸針の業に非常の熟練を得、後來他の淑女等ブース夫人の縫へる物を見て夫人の手に成りしとは知らず、己等も子供の服縫はせたきに斯る手際の裁縫師は何處の裁縫師なるやと問はること折々なりしと云へり。實にブース夫人は糸針の業に長せるのみならで、八人の子供を育てり、家は雛形の如くよく治まりぬ。記憶せよ救世軍の母は、幼少にしては人形家族を治め、長じては子供多き家を治め得て整々たりし尤も婦人らしき婦人なりしを。

ブース夫人は十二歲より禁酒事業の手始をなしぬ。十二歲の年夫人は少年禁酒會の書記となり、形の如く集會を開き寄附金を集め、時々は吾寢室に閉ぢ籠りて禁酒雜誌に送るべき匿名の投書を認めたり。食時は夫人にとりて尤も有益なる敎育の時なりき。ブース夫人の父は牧師ながら熱心の政治論客にて、當今の問題の入りわりを其女に話し聞かするを樂みたり。シカして此の十二歲の女政治家は幼なしと雖ども一個の見識を持し、常に食卓を隔てる其父と論戰をなしぬ。殊に其意見の衝突せるは、舊敎徒の參政權を予ふるや否の問題にて、此少女は「舊敎徒は古來常に政權を濫用したれば、政權を托す可きものにあらず」との說を懷きしとなり。英米の婦人は敎育あるもなきも皆多少の政治思

想を有す。ブース夫人の如きは一生宗教心燃ふる如く、其精神はあまり狹隘嚴刻と云はるゝ程只管此方に熱中せるも、夫人は尤も實際的の人なるが故に實地の問題を忘れず、靈界の問題の爲めに目前の事物の變動を看過せざりしなり。余輩は先きに社會の大運動の原となる婦人は、また能く家を治め婦人らしき婦人にてあり得るを見たり。今者熱心燃ふる如き女傳道師またよく政論家たり得るの實跡を得たり。

約巴爾（上）

破日生



「ジョセフ、ジョーベル」彼の名は殆ど英國に知られざるのみならず、彼の故國佛蘭西に於てすらも名高からず」とは、マシウ、アルノルドの云ふ所也、而して恐くは我邦に於ても亦た彼の名未だ傳へられずと信ずる也。

彼は千七百五十四年（桃園天皇寶暦四年）ペリゴールの一小市モンチグナックに生れたり。彼の父は醫を業とし僅なる收入を以て多き家族を支へたり、而して「ジヨセフは彼の冢子たりき。彼は八歳にして郷校に入り、後ちツールーズ公立學校の助教となる、彼が此處に在りし間大なる感化を蒙りたるは、彼の上僚が敬虔篤實なる「ジェスイット」教徒たりしが爲也。

彼は二十二歳の時、其の健康を害ねたりしが爲に職を辭し、モンチグナックの家に於て、勤勉力學之れ勵み、彼が生涯の最も大切なる二箇年を送りたり、而して彼は千七百七十八年（後桃園天皇安永七年）其の運命を試みんが爲に巴里の文學世界に出で來れり、是れ恐くは青年文士の常に誘はれし逐鹿の野たりしならん。彼はチデロット、ダーレンベル、マルモンタル、ラハーブを知り、次世の文學界に大名を博したる一人彼の如き青年、シヤトーブリアンの朋友、未來の大學總長、フオンテーンと最も親くなるに至れり。されど彼が漸く其の

名を知られんとするに當りてや、彼は「自ら高名の地位に立たんと欲するよりは完全の人物たらんことを孜むるに」至りぬ。シャトーブリアン、エピキュラスの名言を援て曰く、「彼は彼の生涯を隱すことを撰みたり」と。然り彼は其の生涯を隱さんとしたりしかば之を知ると最も難し、されど猶ほ二箇の事實を語り得る也。一は千七百九十年（光格天皇寛政二年）國民議會が全佛國に代議士を擧ぐるや、モンチグナックの人民はブルータク頌德傳中の一人として信じたる青年の品性を記臆せり、彼は單純、勉强、嚴肅の人として彼等の中に活きたりき、彼は多年彼等を去りて在らざりしかど、彼等は告げずして彼を撰めり。推撰は聊かジョーバルの希望に協はざりしと雖も、彼は之を辭するの不可なるを思ひて諾したり。彼は二年の間最も堅實に又た最も誠實に其の義務を全うし、長く彼等をして其の功蹟を忘るゝこと能はざらしめたり、彼が職を去るや、市民は再び彼を撰めり、されど遂に却けて受けず。他の一事は即ち是也。千八百九年（光格天皇文化六年）ナポレオンが佛國敎育制度を復興して大學を設ふけ、フォンテーンを擧げて總長と爲すや、フォンテーンは皇帝に說て、新大學の評議員を薦めたり。其の二人は卓絕の士なりしかど、第三に擧げられたるは未だ甞て世に知られざるジョーバルなりき。フォンテーンの薦書に曰く、「此の名、先きの二士の如く世に知られずと雖も、臣が以て最も緊要也と感ずる所の名に外ならず臣はジョーバル氏を知れり。其の品性と才識とは甚だ高く甚だ勝れり。陛下若し臣が保する所に由り、幸に彼を容るゝに至らば、幸甚之に過ぎたるなし」と。ナポレオンは總長を信じ、直にジョーバルを擧げて大學評議員に任じたり。

ジョーバルの婚姻したるは千七百九十二年より千八百九年までの間、即ち彼が齡三十九歲より五十六歲までの間にありき。彼の生涯は其妻の家族が住したる、ヨーン河畔のヴィールノーヴ、今は里昂鐵道の通過するボルゴーンの一小都と巴里とに送られたり。ヴィールノーヴの彼の家は、其の室高くして窓明に、彼の言を以て

すれば、「大地を見ると少くして青空の潤きを仰げり。」是れ彼が家居の狀態なりき。

年は逝けり、彼の朋友、多くは青雲の志を得て、世に知られたる著者政治家となるに至れり、されど彼は遂に影に殘れり。彼は多く健ならざりしかども、絕えず、讀み、絕えず思へり、彼は常に其の備忘錄に誌すことを怠らず、又た最も面白き書簡を認むるに撓まざりき。彼の天性は快活にして樂只なりき、彼の精神は又た驚くべき反抗力を備へたりき、彼は實に唯だ一條の細線を以て、其の生命を繫ぎたりしが如くに見へき、されど其の細線こそ極めて強きものなりき。

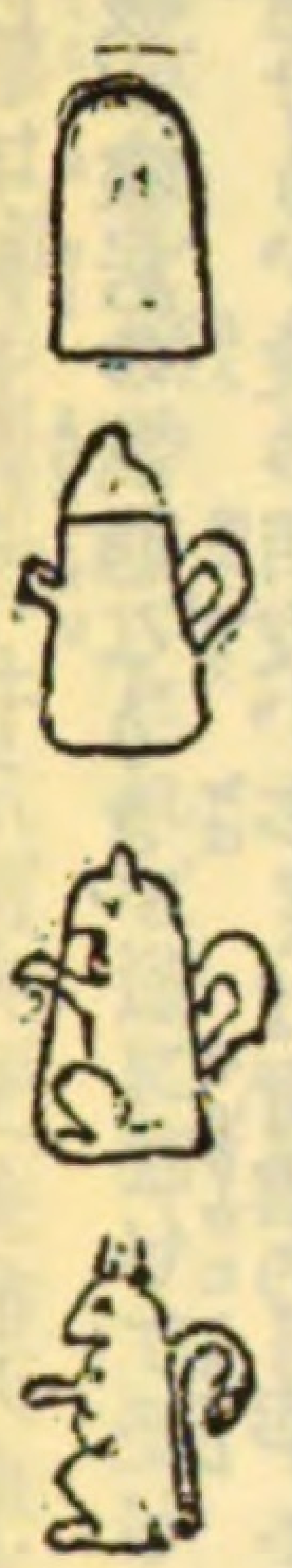
彼の心靈と其の智識とが徙ゝ熟し來れるに從つて彼の朋友は倍ゝ彼を訪問せり、彼は屢ゝ其の訪問者を褥中に迎へたり、何となれば彼は午後三時前に起くること稀なりしが故也。彼の快らぬ日は、ジョーベル夫人自ら閨扉に倚つて番兵となり、溢流し來れる噴泉の如き、三十人を辭り還さゞるべからざりし也。フオンテーンは大學に在りしと雖も、彼に計らざれば一事をも爲さず、斯くてジョーベルの想と筆とは常に其の友人の爲に費されたり。

彼がヴィールノーヴに在りし時、東隣の青年僧侶は彼の書齋と其の會話とに依つて益する所あらんとして、彼を訪問するに慣れたり、而して彼はコレッヂの如く斯る人を幸し、斯る人に便したるは其の幾何なるを知らず。

年は益ゝ進めり、彼の朋友半は黃土に歸す、殘れる者は只だ政治にたづさはるものゝみなりき、政治は彼が憎みし所也、されど彼は朋友と爭はず、故に彼は其の一人をも失はざりき。彼は千八百廿四年（仁孝天皇文政七年）五月四日を以て此世を去りぬ時に年七十。彼の沒後一二日にしてシャトーブリアン、新聞「討　論」に禮を厚うして彼の訃を傳へたり、彼は云へり、「人は此の世に對して存したる事に依つてのみ此の世の記憶に存し能ふ」と。是れシャトーブリアンが彼が爲したる功蹟を世には告げんとしたる也。

ジョーベルの存稿は篋中に聚められてありき。彼は之

を公に出さんと欲せざりしかば、之を世に出ださんが爲に備ふるは頗ぶる難かりき。彼の未亡人ジョーバル夫人は其の良人の許さゞりし所のものを公にするは如何にやと躊躇せり。されど彼の女が其の臨終の近づかんとするに及んでや、空しく之を篋底に秘するに忍びず、乃ち諸友に圖りて僅に其の中の一卷を印刷して以て世に行ふに至らしめぬ。而して之を出版したりしは、彼の最も友誼に厚きシヤトーブリアンにして、實に千八百卅八年（仁孝天皇文政十一年）ジヨーバルの沒後十有四年にありき。而して「第二世界評論」に於て之を世に介したりしは則ちセント、ボーヴなりき。然りセント、ボーヴありて始めて彼の名を知ることを得たるなれ。既に埋もれんとしたりし彼の名は、彼に依つて此の世に活き能ひしと謂ふも可也。



文藝

懷舊

愛山生

夢の如き童時の歷史は此頃篋底の寫本に因りて再び我心に活現し來りぬ。是は我外祖母の自ら記し置かれしを我が寫し置きたるものにて、維新の際德川氏の臣下が駿遠二州に移住せし樣を記したるものなり。曰く

　德川家、駿河靜岡の城にうちいらせ給ふ比、いと賢きさとしありて、御供をなん堅く止めさせ給ひける。されど仰にもとり奉りて給はりものなきもさらに厭ひ侍らずと皆御供つかふまつりけり。

然り我一家の久しく棲なれし江戶を離れて靜岡の鄙に移住せしも唯累代恩顧の主家を見とゞけ奉らんとの素志に外ならざりし也。又曰く

まことに幾その人々駿河、遠江、三河に居あまりける。さるはふるき家を買もとめんとなすもあり、ある

は假に家を造らすとて、たくみをまねきて語ふもありけり。多くは人の家のかたすみを借りて住も有り、是をおしなべてかの地にてはおとまりさんとよびなしけるとかや。

おとまりさんは即ち旅客を意味するなり。嗚呼吾人は終に家なき旅人とはなりぬ。飄々柳絮の如く風を逐ふて轉ずる底の生涯は正に此時より始まれり。天下の人若し一片仝情の心あらば靜岡縣士族の青年が名を成す遅きとを怪しむ勿れ、彼等は家なく土地なきものとなり了りしなり。又曰く

かう替り行く世の中に、安らかに身をふるまふべくもあらず、いかなる野の末、山の奥なりとも、詫住居せんと元よりの願ひなりとて、心しりの〇〇子ぬしもろともにはる〲の山さか、かたみにたよりと、手に手を取かはし、からうして靜岡にぞまかりける。さるはかなき身にも心ばかりは君がみかげに添ひまゐらせ御ともつかうまつる數にいることそほいにはありけれ。

我君のみかけにそひていとせめて
　　うきをするかに身をや碎かん。

封建武士の女子は斯の如き意氣を有したり。又曰く

靜岡のほとりなる、かた山里の荒たる宿になん住つきける。さるは軒をあらそふ八重むぐら、蓬も高ふ茂り合ひ、とひ參る人もなく、淋しさいはんかたもなし。頃は秋なり。夕べの雲のたゝずまひも唯ならず、旅ねの雁の心ほそけに啼渡るも、我身のうへにくらべられ、所からにやいとたえがたき迄のものかなしさなる。さはあれど蔦の紅葉のかゝるべしとは、兼てより思ひまふけしとにこそあれど、詠めがちにて日はくれにけり。山ぎはすこしほのめきて十六日の月馴ぬ住家を、人とひがほにさしのぼりけり、元見し影のそれながら、おもひかけぬこゝちして、めづらしうはしに出て見る。

武藏野に見し影よりもよもきふの
　　やどこそ月はてりまさりけれ。

國分寺の櫻、麻機沼の蓮、賤機、久能、有渡、德願寺

の諸嶺、安倍川の一帶白沙、淸見潟の千頃碧濤。或は三穗崎の桃花、大崩の危崖、形勝の地固より多し、是皆吾が童時より遊べる所、予をして若し江戸に人とならしめば奚ぞ天然の美を見ると斯の如く多きを得ん、よもきふのやどこそ、眞個に月は光を增しけり。又曰く更ゆくまゝに、萩うちそよぐ、風につけても故里人の、音信のみなつかしき、かゝる山里の荒たる宿に住つきたりとも、告もやらねば知らずやあらんなと思ひつゞけて寐もやられず、籬の霧のしめ〲といとゞひまなく立わたり、月も曇りがちにて、明なんとする空のけしきとめかたうあはれなり、

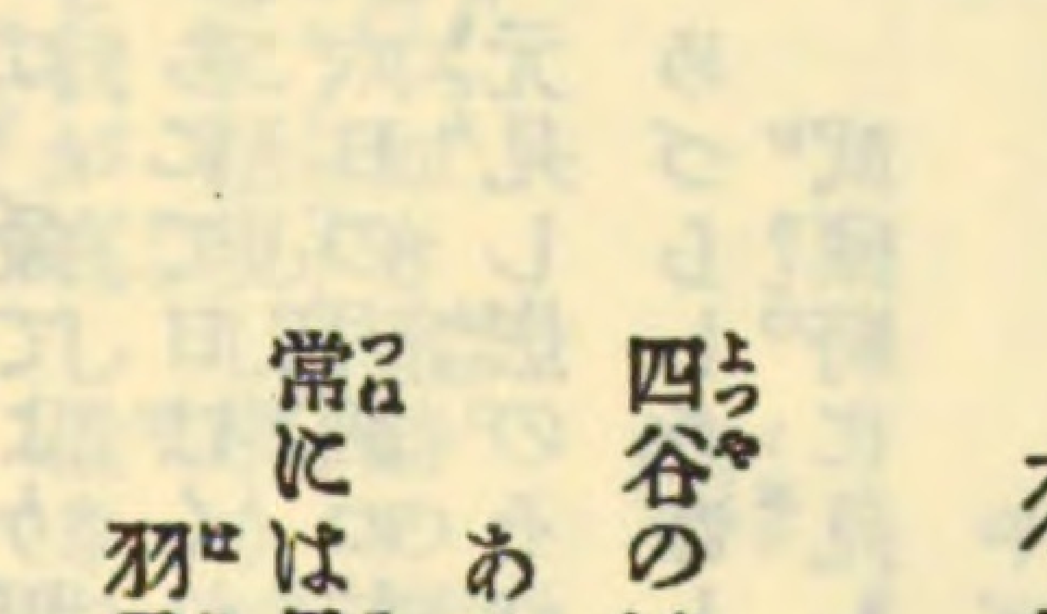
哀にも霧間に殘る月影ぞ
すむとしられぬ、身の類ひなる。

讀んで此に至る覺へず涙零つ。政界の一勝一敗本と自然の理なりと雖も、敗者たるもの、前朝の臣たるもの、誰れか戀舊の情なきを得んや。

羽子つく少女

湖處子

四谷のはての裏まちを、
ある朝ぼらけ我往けば、
常には見ざる少女子が、
羽子つきつゝも遊ぶなり。
友もなければ唯ひとり、
ふたつの袂ふりはへて、
つくやつく手も、衣手も、
羽子もろともにあがりつゝ。
時しもあれや、うしろより
白髮嫗のよろ〱と、
脊にも餘れるふろしきの、
包を負ひてたどるなり。



羽子のかひよりその媼、
　見るや、忽ち少女子は
つく手收めて返りみぬ。
　羽子はうしろに落ちにけり。
落たる羽ねを少女子が
　取あげながらつきもせず、
道をゆづりてつく〴〵と
　媼の姿を打みたり。
媼は、杖にすがれども、
　常すら足の危きを、
重き重荷に腰折れて、
　倒るゝばかりになりにけり。
支ふる腕ともろ共に、
　さがる包の括りめに、
頸しめられて息の根も
　とまるばかりに成にけり。
人の重荷を我が負へる
　心地やしけむ。少女子は
おのれの腰のかゞむとも
　知らで媼をながめつゝ。
やがて『母よ』と叫びくる、
　わかき女のかけつけて、
媼の脊より己が手に、
　ふろしき包とりてけり。
包とられて生返る
　媼見るまづ飛び立ちぬ。
あはれ少女子いかばかり
　心うれしく感ひけむ。
またつき出すや羽子も身も、

前より輕くあがりつゝ、
天津少女子の下り來て、
舞遊ぶとも見ゆるなり。

嬰兒（つゞき）

一一生

彼の成長が今年となりて一層目立つなり、ソハ彼の觀察が稍ゝ精細になりたる事、彼の擧動が破壞的より建設的に變じたる事、及び戯れに人を嚇し欺くの巧智を生じたる事なり、以前の彼は物の形躰と人の擧動を熟視するとなかりし、今は則ち之れ有り、以前の彼は見れば忽ち攫み攫めば抛げ破ると多かりし、今は散亂したる物を整理せむと試み、又た人の擧動を熟視して摸擬せんとするなり、

土瓶の蓋を取りて下に置けば、彼は蓋を持ちて土瓶の上に置くなり、鍵が坐敷に在れば、彼は之を拾ひてシマリの個所へ持ち行くなり、鼻紙を持てば、人の膝に上りて鼻頭へ突き付くるなり、櫛を見れば人の頭上へ持ち行くなり、來客に茶を出せば、彼は其呑乾したる茶碗を客の口邊へ棒ぐるなり、蟇口を持てば臺所の出口へ向つて這ひ付くるは、擔ひ來る八百屋より買物することを見知れるが故なり、風呂敷を見れば、忽ちウマ〳〵と言ふは何時も之を以つて燒芋を買ひに行くを見知れる故なり、風呂敷包の中は必ず燒芋と斷定したるにや、ある日彼の母が玩具數種を買ひて、風呂敷に包み持ち歸りしかば、彼は直にニコ〳〵笑ひながら、急ぎ這ひ付けてウマ〳〵と呼びたり、

彼の祖母は胃病なるを以て、常に粉藥を服用し居るなり、祖母が罐中の粉藥を匕にてスクひて口中へ入るゝ容子を、彼は熟視して確かに記臆したるなり、彼は匕さへ持てば祖母の口邊へ捧ぐるやうになりたり、

彼が尤も喜ぶ玩具は、張子の馬なり、彼が馬に向つての恩愛は中々に深きものなり、先頃新しき馬を買ひたるゆゑ、足を傷きたる古き馬を西方の軒下なる溝中へ捨てたるが、既に二十日も立ちて爛れ潰ぶれ、殆んど

馬の形を失へるなり、されど彼の執心は未だ消へやらず、西口の障子を開きて小便させる毎に、彼は悼惜の聲を揚げてお馬〳〵と叫ぶなり、馬に乳を呑ませむとて彼の爲すこと尤も面白し、馬の口を母の乳房に押し付け、暫くありて馬に呑ませることの惜しくなりてや、馬を抛げ棄て、自ら呑むなり、斯の如くすること日に二三回あり、嬰兒の遊戯も亦極れりと謂ふべし、

彼は從來の經驗にて、屢々叱らるべき事柄を知りたるが如し、父の机邊に來りて書籍抔を攫み散らさんとする時には、必ず先づウーンとて叱る眞似するなり、ランプには手を觸るべからざることと諦めたるものと見へ手を出す眞似をしてはウーンと叱り直に引込めるが常なり、

人を欺くことを敎へたることは無けれど、彼に煮餅なんど持たせるときは、傍人に與ふる如き容子を爲し、傍人が手を出せば直に引込ませて面を背けるなり、

彼の我儘を言ふときは實に大困却なり、彼は柳の樹の梢に烏の啼き居るを喜び、そが啼き止みたりとて機嫌を傷ふたり、又た一列の雁が飛び行くを見て喜び、そが見へぬやうなりたればとて機嫌を傷ふなり、其他天邊に輝ける明月が取れぬとて泣き、檐端に落つる點滴が攫めぬとて泣く、彼の我儘は概ね此類なり、

近江聖人

『ふると見ば積らぬさきに拂へたゞ、風吹く松に雪をれはなし』。

藹乎たり、潤乎たり、而も活趣あり、流石は我が陽明學祖の詠と稱するに足る。彼が至誠の人なりし所以、彼が精神の人なりし所以、而して彼が大克己の人なりし所以、想見し得て猶生けるが如し。

斯く彼は渾然たる大人物となり、鄕黨德に化し、稱して近江聖人と謂ふに至れりと雖、彼れ中江藤樹の少時は決して圭角なきものにてはあらざりき。

世の彼を見て初より淳樸の人の如く思ふは誤りなり。

彼は固より精神的の人にして、寧ろ他と衝突し易き質ありしが、彼は唯最も嚴精なる母の感化に由りて大克

己力を養ひ、以て世の最も謙謹なる一人とはなりし也。

曾て至孝なる少時の彼が、母のわかぎれを痛ましむるを思ひ、妙藥を得るに及んで遠く家に歸りし時、彼の母は彼を拒で家に入らしめず、之を門外より再び伯父の許に追ひ返し、以て其講學を勵ましめし如き、彼が母は如何に嚴精なる母なりしぞ、彼が母は如何に氣丈なる母なりしぞ。

讀者卷頭の挿畫を看よ。積雪地に滿ち、凍月天に在り、阿兒は蕭然として門外より去る。世の姑息の愛を知て眞成の愛を解せざる母にして能く忍んで之を餘所に見るべきか。

吾人は近江聖人の近江聖人となりしを驚かざるなり、然れども竟にかの近江聖人を作りたる彼女を驚かずんばあらず。

新刊書

『女子興風雜誌』　大日本女子興風會

高桑靜子其他の婦人が沮す所『女子興風雜誌』あり、曰く我が女子興風會は左の方針を取ると、

世の流行浮華の弊を矯正し淑德質素の美風を養成するを期す

女子に關する一般の問題を研究して之れが方法を設くること

會の擴張に從て女子商工業學校を起し或は海外地方に日本美術館を設くること

機關として新聞又は雜誌を發行して本會の旨趣を明にすること

以て雜誌の如何なるも知るに足るべし、

家政

育兒瑣談

母の無學



廣き芝生の原あり、處々に草木繁りて、花は笑ひ、鳥は啼けり、彼方に質素なる裝したる婦人あり、三人の小兒を携へて芝生の上に坐して、遊び且つ語りつゝあるに、小兒は或は笑ひ、或は驚きたる樣をなし、或は戲れて餘所の見る目も樂しげに遊びくらしけり。

此方には、最と美麗なる装したる貴婦人とも思はしき人あり、一人の小兒と、之につき從ふ侍女とを携へ、是また芝生の上を、あちらこちらと遊びあるくに、小兒は何故かむづかりて、或は啼き、或は怒り、母と侍女と、二人にて一人の小兒を遊ばしむること能はず、果ては母の顏に、怒の色現はれて、折角の樂しかるべき春の色も、面白からずなりき。

此は何故にやと云はゞ、唯だ一の道理あり。質素なる婦人は形こそ質素なれ、其心は甚だ富みて、小兒が鳥を指さして其聲を聞けよと云へば、さなりし、見よ彼鳥は百枚の舌を持つほど、多く啼くか故に、百舌とは呼るゝなり。兒もまた餘計なることを語り給ふなと敎へ、鶯の聲聞けば鶯は肉食せさる清潔の鳥にして『肉食する鳥は歌ふことなし』との諺あれば、人間も美食ばかりしては、好き働きは出來ざるものなりと敎へ、小兒が木の葉を取り來れば、之につきて木の葉の細胞の理を語りて、顯微鏡にて見れば驚くべきものあるを敎ゆるなんど、小兒の好奇心に對して、一々滿足なる說明をなし、一方の美服したる婦人は、容貌こそ富みたれ、其心貧しく、小兒が鳥を指させば、共に鳥を見るのみにして、其鳥の鳩なるか啄木鳥なるか、百舌なるかすら敎へ能はざれば也。人は形の富めるよりも、心の富めることそよけれ。

如何にして小兒の通じをよくすべき乎

一年か一年半位經過したる小兒は、往々にして、通じのとまることあるものなり。こは乳よりして、慣れぬ米飯、若しくは菜食にうつる間際なれば、腸胃の之になれさるが故也。かゝる時には、三日位も通じのつかぬ事多し、かくて三日も立たば、熱となるの憂あり。さりとて一々醫師の藥をのませんには、不便利にして、且つ藥は成るべく用ひざる方、身躰の健康によく、度々用ゆれば、藥も遂には効能を失ふべければ、藥を用ひずして通じをつくるの方を知るを肝要とす。第一方は灌腸器に赤砑糖と鹽、各々三勺位を微溫湯一合餘に溶解し、之を腸内にそゝぐなり。若し之にて効なくば、

ブツキリ飴を、母親の口中にて柔くし、長さ一寸太さ小兒の親指位にして、其先きを細くし水をかけてかたくならしめ、其先にグリスリンを塗抹して、肛門に入るゝなり。若し少しにても飴の形外に見ゆれば、直ぐに洩れて返るものなれば、十分腸内に入りたるを見て、指をはなすべし。さすれば一時間も經過すれば、グリスリンが腸内を刺激するがために、便通あるべし。

若しまた之にても通じなくば、袋の大きさ一寸位の少さきゴムの灌腸器に、グリスリンと生ぬるの湯を等半にして、灌腸すべし。

返へす〴〵も小兒には、成るべく丈け、藥を飲ましめざるをよしとす。

家庭衛生

病人に與ふる食物

今日、病人に與ふる食物として牛肉鷄肉のスープ、若しくは乳を與ふること、何人も知らざるものなかるべし。然れども病人の性質によりては、容易にスープを勸む可らざるものなり。よく〳〵注意すべきことなり。』即ちスープは躰熱を進むるの力甚しく、寒冷の夜、一椀のスープを飲みて寢る時は、終夜、暖温を覺ゆるほどのものなれば、目下熱氣ある病人に與ふべからざるものなり、若し目下熱氣ある病人に與ふる時は其熱を進めて、病人に一層の苦痛を與ふべし。故に熱氣ある病人にても、全快の後はよけれども、熱のある間はスープを與へずして、牛乳を用ゆるをよしとす。

漆に代用すべき品

室内の粧飾品として、寫眞、繪畫などを額に製することあるに、其額縁を漆にせんには、甚だ手數にして、且つ出來合の品を買ふよりも、高價にあたることあり。かゝる時には、代用漆を用ゆるこそよけれ。そは漆を塗らんとする部分に、良好なる日本の墨を塗り、能く〳〵乾かして『日光に乾かすべからず』のち、其上に寒天汁の濃厚なるものを刷毛にて塗抹すべし。さすれば最と美麗なる光澤となりて、素人には、殆んど眞の漆

と見わけがたきほどのものを得べし。

調理小話

水飴の効用

我國にても、追々パンを用ゆるの場合多きに至りたるが、通例の食用の外、勸めたきは、常に辨當を用ゆる人若しくは、山河に遊ぶ人、又は小兒に菓子の代りに與ふることとなり。辨當を常に用ゆる人は、飯米の壓せらるゝと、臭氣の生ずるに困り入ることとなるがパンを用ゆれば、此憂なかるべし。また小兒には、餘り甘き菓子は、價高くして腸胃を害すべければ、（殊に餡菓子は甚し）パンの有効にして、價の廉なるには如かざるべし。

然るにパンを用ゆると共に、何をつけて食ふべきかと云ふ疑問を生ずるなるべし。通例はバタをつけて食ふことなるが、之は價甚だ高くして、且つ外國より來る品には、擬物多くして、中には臘を入るゝなど、有害なるもの多し。日本製の品は純粹なれども、價高くして、日々用ひがたし、故に之に代用すべきは水飴也。」

水飴はたゞに其價の廉なるのみならず、其滋養分は、遥かに通常のバタの上にあり。御雇教師の何某は、日本の水飴に鐵分を加へたらんには、獨逸邊にて専ら行はるゝ肺病藥の代用品となるべしと云へる程にして、バタと水飴の成分を比較すれば、左の如し。

	バタ	水飴
水	一三、〇〇	一五三、六四
窒素質	〇、七八	〇七、八四
デキストリン	〇	三六〇、八八
灰	〇、四〇	〇二、三六
脂肪	〇、七八	〇〇、五三
砂糖質	〇、五六	四七九、二〇

水飴は價甚だ廉なれば、買ふもよし。暇と便利のある家にては、之を作るもよし。之を作らんには、先づ糯米一升を通常の飯をたくが如くしてたき、之れに湯一升五合を加へ、其中に麥芽二合を入れてかきまわし、華氏の寒暖計にて百四十度位の温度にしてをくこと、

入時間位の後、之を木綿の袋に入れて絞り出すべし。此絞汁こそ、即ち飴にして、之を釜にかけて適宜に煮つむるなり。

右の飴をパンにつけて辨當とせんには、パンを三分位の厚さに切り、其表に飴をぬり、また一片のパンを取りて之を掩ふべし、此くすれば飴の外にもるゝ憂なかるべし。

馬鈴薯の料理

臺所に出入する八百屋に向つて、馬鈴薯を持參しをるや否やを問くに『イエ餘程、食物に御注意なさる方ならでは、御用ひになりませんから』と答ふるを常とす。此くまで都にては、餘程食物衞生に注意する人の食膳に上る品なるに、地方にては餘り馬鈴薯を珍重せざるは、惜しむべきことなれば、左に二三の調理法を記さん。

馬鈴薯の皮をむきてザットゆでゝ、之を厚さ一分位に輪切りにして、牛の脂肪の沸騰せる中に入れて、暫時の後取り上げ食すれば、淡白なる美味を得べし、されは肉食には欠くべからざる食料也。

同しく之をうでゝ、皮をむき、鉢にてすり、細抹となしたるのち、應分の砂糖を加へ、之に乾天の汁を加へて、重箱の內に入れて放冷せば、一種云ふべからざる美味ある羊羹となるべし、小兒の多き家などにては羊羹に代へて利益少からざるべし。

また之を山葵をろしにてすり、水にて震蕩し、其の上水をすてたる後に天日に乾かせば、上等なる澱粉を得るは、已に人の知る所なるべし。今之にパンを燒くと同一の方法にて、釀母（イースト）を作り、釀母を此澱粉に和して、指につかざる程に揑り、後冷水もて粥程に柔かくし、之をブリキの器に入れて、炬燵の上など溫度八十度位の程度の所にをくこと二十四時間にして玉子の黃味を加へ、兼て前々號の家庭雜誌に示したるパン燒ストーブにて燒かば、好きパンを得べし。

此外、米に加へて食ひ、醬油を作り、飴を作り、菓子を作るを得べけれども、それは略すべし。

社交一般

春 蓉

衣更月

昔ならば本月は衣更月といひて、綿入より袷に移るべき時候なれど、今日二月十五日は恰も舊正月元日に先つ二日、年の内に春は立ちたれど、去年とや言はん今歲とや言ふべき、今歲は春信漸く江南の一角に達するのみ、人は鶴裘を着て、却て梅を雪中に探るの候なれば、先づ〳〵四月初旬頃までは衣更の仕度には早かるべし、若し一たび杖を城東城外の梅林に曳かは、天爲の淸觀の外更に綺羅綿繍の美觀を見む、今梅見衣裳流行の二三を上中下に別ちて記せば

上等社會

郎　一を市樂、次を鋼絲織、次を繋絲織の上にヒダ附の二重鳶形の外套を被るもの最も多し、羽織の流行はアザと略して記さず。

婦　最も奇にして最も面白く最も流行の傾きあるは、近來織出す御召なり、中にて小紋形最も行はれ、眘生羽織には竪木匡形を用ゐぬ、全体今歲は丈の短く綿入羽織とも見擬ふ眘生羽織流行せられぬ、而して此品柄を西陣應賀織と中すよしなり。次は御召風通織。其次は京御召を多く見受けけり、鼠地にて小紋形や木賊縞流行の最上位置を占めけり、羽織の如何は詋かず、例の如く藤色のお高祖頭巾と淡茶の肩掛は相變らずなり。

中等社會

郎　一を結城紬と節絲織孰れも流行の魁を爲し、柄は紺地にて大名縞や萬筋最も行はる。二た銘撚縞と秩父縞。

婦　多くの服裝中にて最も目立ち最も面白きは山繭糸織なり、向後も必らず流行中の屈指とならむ、其價格の安廉に比し品に於ても柄に於ても頗る人氣に投する向なり、此品にて小兒用紫色矢飛白被布を着するもの美麗なり。次は八丈縞、享保の昔城木屋お熊が不斷着なりしとて、甚しく忌み嫌ひ、爾來娘の衣裳に禁物の慣習ありし八丈縞も、頓と明治の今日に復活したり、大流行、大景氣は新年の雜觀記に錄したるが如し、黃八丈の中昨今最流行と見受るは八王子より織出す頗る優雅の出來なり、光澤、八丈島及秋田より產出するもの八王子產に亞ぐといふ。秩父縞（男物同樣）も弗々行はれ、八王子產山繭絲織は流行の中位を占む、婦の着用せるを見るに大率中柄なりし。

平民的流行

此流行には男女を別たず。

瓦斯糸織　これ平民的流行の最たるものなり、縞柄は種々樣々なるもの用ゐられ、其珍柄に至りては一見市樂に異ならず、人氣の向くも宜なり。

瓦斯双子　男女共に用ゐらる、男子の羽織に用ゐるもの多し。

絹双子
　同斷
通常双子

唐棧柄流行。

價格

流行衣服購求の爲め、確なる吳服店に就き其價格を問けば左の如し、

上等社會　（男用）一樂自十圓至十二三圓、鋼絲織自八圓至十圓、繋絲織自七圓至九圓。（女用）西陣應賀織自十一圓至十三圓、御召風通織

自九圓至十一圓、京御召自六圓五十錢至八圓五十錢。

中等社會（男用）結城紬自五圓至五圓五十錢、節絲織自三圓至五圓、銘綜自二圓五十錢至四圓。秩父縞自二圓五十錢至三圓。（女用）山絲織自三圓五十錢至五圓、八王子產縞八丈自三圓至四圓五十錢、八王子產山節絲織自二圓至三圓。

平民的流行　瓦斯絲織自一圓五十錢至二圓五十錢、瓦斯双子自一圓七十錢至二圓五十錢、諸双子自一圓至一圓五十錢、普通双子自五十錢至八九十錢。

右の價格は日本橋白木屋商店にて聞き質せしものなり、同店にては郵書又は電話にて注文あり次第、直ちに物品持參する由なり

流行のハンケチ

近來婦人用にては麻地の一隅におのが姓名の頭字を洋書(ブック)の「キヤピタル、レツター」の如く美花美艸の間に混へ植ゐ、譬へば伊藤ならばIの文字より種々の花を咲かせ、中川ならばNの字の兩柱(りやうはしら)に珍らしき蔦、蕨をまつはらせて縫取したるもの最も流行す、價は廉からず麻地のみにて一ダース極上五圓五十錢上三圓八十錢、並二圓五十錢之に縫取料廉なる所にて七十錢以上は二圓まで、隨分貴族的なり。

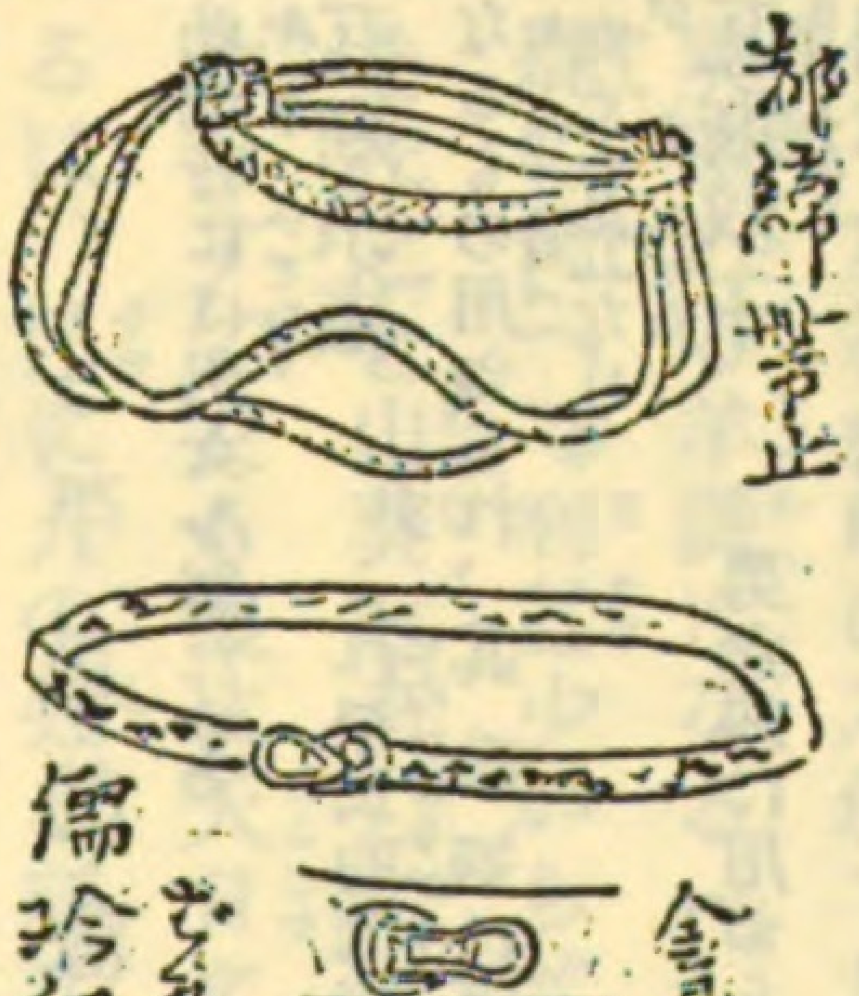
交際社會の紳士間にはおのが肖像を絹ハンケチの一隅に寫眞したるもの行はる、これはハンケチのみならず、懷中時計の面にも總ての所持品にも。日本の兒女子が好んで紅き格子縞のハンケチを用ゆるを、洋人は之を見て笑ふ由なれば注意すべき事なり。

舶來物の流行色（並に婦人用）

西洋舶來の婦人用物品は襟衣、手袋、靴襪に至るまで悉く黑なり、靴襪の如きは他の色を用ゆるもの絕無と申しても宜し、男子小兒用にも黑を用ゆ、黑は一體喪用と爲すものなるが如何なる故なるや、這は歐米の流行にて日本にも感染したるものなり。

流行の帶留

一時の流行かは知らねど前月頃より都締一名福助好と呼ぶ帶止流行す、



これは一月木挽町歌舞伎座に於て興行せし安政三組盃の舞臺に、中村福助がお園に扮せし時、此帶止を用ゐしより忽ち世上に擴り目下の流行とはなりたるなり。其形は上圖の如く絹の四打にて金具なく、二個の紐輪を添ふ、色は樣々なれど二十以下は鴇色(ときいろ)又は藤紫二十歲以上は利久流行盛なり、代價は大五十錢中四十錢小二十八錢絹包(くるみ)（即ち心入）に至りては大四十錢中三十二三錢小二十三錢。

次は繻珍(しゆちん)布帛の帶止流行す、金具は種々あれど銀、臺鍍金(ぎんだいめつき)（代價自一圓二三十錢至一圓八十錢）同裝金鍍金(めつき)（代價自二圓五十錢至三圓五十錢）同總金（代價自七圓至十圓）等なり巾三分位。上に圖したるは紐は繻珍にて金具の處は一見結目(むすびめ)の如くなるも實は金具にて「ひツかけ」なり、代價は七十五錢なれば此處の流行最も佳なり、頭飾は無論、打紐も馬手(めて)に成行く傾あり、此流行は日々(ひゞ)に古代に遡るなり。

流行の紙入、蝦蟇口、

紙入(かみいれ)　革にては露西亞革に極彩色の漆畫を施したるもの頗に流行

す、代價は二ッ折一圓五十錢位、三ッ折二圓位。吾妻利久は一圓四五十錢。紐取に至りては高價の品なれば相手は少きも兎々西洋人等に行はる、以て名刺入となすべし、代價は三折下等三圓五十錢より上等七圓に至る、緞紗にて二ッ折は四十錢より段々。

蝦蟇口　「ブラシュ」の兩口流行。

懷中時計及び鎖

矢張金側、銀側にて他の金屬は餘り見當らず、金屬の鎖は一体に流行せず、偶に用ゐ紳士又は物數寄なる人が胸間にピカつかする鍍金の光明を見るのみ、惣して部人士は多く鉄色か珍色絹の紐を用ゐ、ザミなる人は粢樸なる革紐を用ゆ、當世は時計を見せびらかすやうなる胸間の位地に置かず、成べく見ねやうにする風とはなりたりけり、而して鎖の流行形は平つなぎ、長つなぎ、八の字、女夫つなぎ重に行はるゝ由なり。

髮の流行附屬品

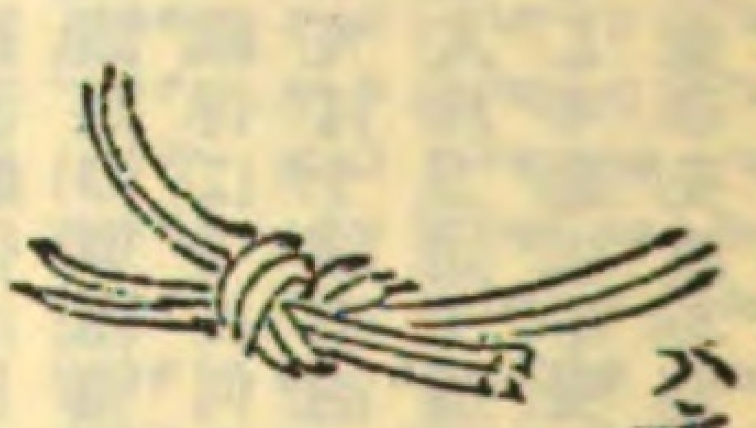
櫛、笄、簪　は從來報したる如く、禮式には鼈甲にて櫛は斗京形笄はアラレ形禮服には同形の蒔繪したるもの、愛御には透磨形、簪には金銀の蛙脚、玉は珊瑚の流行は相變らず。

向挿　之には種々あれど前月歌舞伎座開場し音羽屋が奴凧を演せしより坊間の子女爭ひて之に擬し奴凧の向挿大に行はれぬ。

花簪　新年より本年は大輪流行し昨今は梅の候さて、護謨製の大輪咲に、身なさかしまに初音するツマミ細工を添へたるもの第一の流行、羽二重製は之に亞ぐ、房はヒラヒラか絹房なり。束髮用は薔薇か白梅兎々行はるれど當時束髮大に廢れたれば、隨て附屬品も捗々しからず。

根掛　銀杏返又は丸髷根掛は從來の流行品の外此頃より護謨の

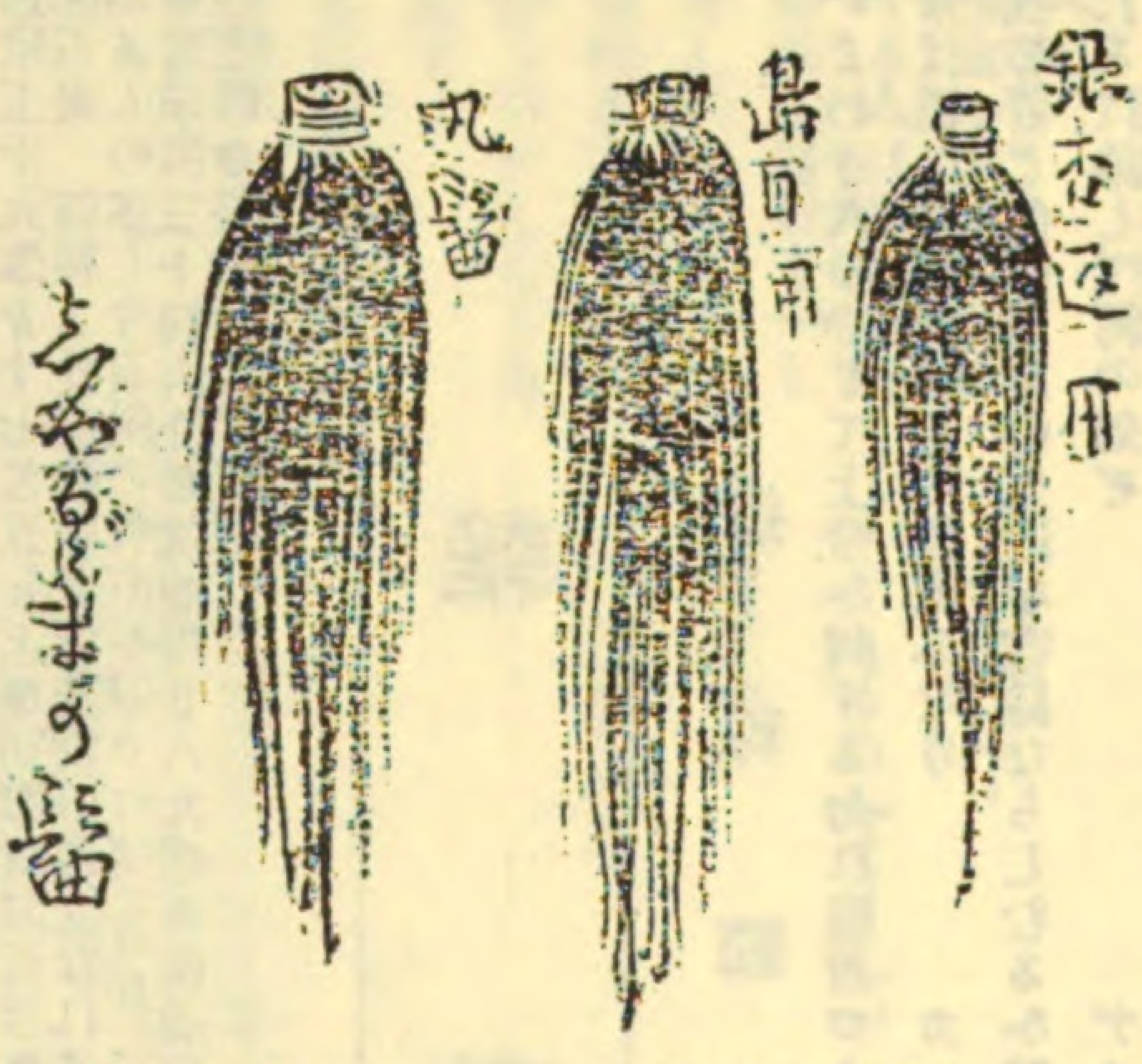
根掛ゴム製



「むすび」重に行はる、八重結と一重結あり、價格も廉なり（八重結四錢、一重結二錢）上に圖したるものは即ち八重結なり。島田用には護謨の唐棧縞流行。丸髷にははし一塗珠（木釜）の波摸樣新形流行し始めぬ、代價は廿五錢内外。

掛物　第一なる絹絲の絢縄、二なる七子織房附の房頗る長き方流行す、色は藤、肉色、鶸又は赤。友禪染の友禪、更紗の友禪の流行の頃となりぬ。

手柄　溜鼠形にて色は水淺黃、鶸、藤紫、青淺黃、ザミなる向には小豆色、藍鼠、銀鼠、梅幸鼠等なり。



タボ止　は鋼鐵製重に行はれ、護謨製等は頓と廢れたり、塗は一なはし一塗次な呉塩塗次な大內塗、象眼付も流行す。右は尾張町一丁目白牡丹にて盛に賣出す。

「しやぐまの」髢　全体「しやぐま」は輕きものなるゆゑ夏向の流行となすに然るべきに本年は昨今の流行なり、「しやぐま」を用ゐるには別に油等を要せ

す、水にて梳くまでなれば蔭張して輕々しき事言ふに及はす、「しやぐま」を髷の外面に出すものもあり、また內裡に隱すもあり、それは人々の好々なり、上に示したるは即ち「赤やぐま」の髢なり。

乘馬と自轉車

以前は官吏、代言人、學者醫者社會に乘馬の流行ありしやに見受けたれど近來軍人を除きては一切之を見ず、之に反して自轉車にて大道を快く乘切る名人都下にも多く出來たり、商家の小僧までが淺黄の股引懸に裾を高々と端折り、三輪車をガタ〳〵と軋らせ行くこそ可笑けれ。

日用品物價（二月十日）

◎白米（圓に付）㊀一等米九升六合㊁二等米一斗●三等米一斗五合㊃四等米一斗一升一合㊄五等米一斗一升八合前月十日の相場に比し三等米以上は變らねど四等米と五等米とは少々上進したり
◎雜穀　一圓に付き大相場は●本賈大麥三斗二升●臨場大麥三斗五升●裸麥二斗一升八合●相州小麥一斗六升五合●船橋小麥一斗九升五合●常州小麥二斗一升●下總小麥二斗一升五合●上州小麥一斗七升三合●札入竹林麥一七八並二〇〇●上割麥一八〇並二〇五●千葉小麥一斗九升五合●肥後上小麥一斗八升三合●當金々時一斗六升五合●流山寄大豆一斗九升五合●川越䒑豆一斗六升五合●同空豆二斗三升●鶉隱元一斗四升五合
◎種油と石油　大相場にては前報より二種とも少々下向なれど小賣は變りなし即ち石油の大相場は左の如し（一箱二斗入）●ホーキ一圓六十八錢九錢●同二番一圓六十六錢七錢●露國一圓六十八錢九錢●チャスタ一圓六十八錢九錢
◎醤　前報と大相場に於ては孰れも少々宛下落したりこれは此品は需要季節の問合なれば自然不味に傾きたる由即ち其相場は（一圓に付き）●赤穗三俵四分●大鹽三俵五分●本齋五俵七分●新齋六俵三分五厘小賣は之に準して買へば間違なからん
◎砂糖　これは一貫目に付きての見當幾匁とは銀の直段にて一匁は今一錢六厘なり●車廿九匁五分ゟ廿八匁九分●台安十八匁八分ゟ十八匁●呂宗玉十九匁ゟ十七匁五分迄●初雪卅匁五分●天光卅匁
◎石炭　前報より炭薪の代價非常の暴騰なれば家々には小ストーブを用ふるもの多し今石炭の代價を擧ぐれば（百斤に付）●唐津炭三十錢內外●筑前炭廿八九錢●豐前足立炭廿五六錢●白水炭廿四五錢●幌內炭廿一二錢

雜錄

遺珠顆々

かよわき人の心もて上帝を判する勿れ澁面つくれる天帝の其後ろには上帝は恒に笑顏を隱して居玉ふなり　カウペル

我等若し佗の同胞の生涯を容易ならしむるを務めずば我等が此世に生れたるは果して何の効ぞ　ヂオージ、イリオツト

眞正の自重は己を思はざるにあり　ピーチヤル

貯金の話（三）

東京貯蓄銀行

東京貯蓄銀行は日本橋區兜町一番地に在り、澁澤榮一西園寺公成須藤時一郎諸氏の取締役たるもの、其確實なるは言ふまでもなし、此の銀行にては何人にても金十錢以上を預るなり、尤も預け人の望みによりては十錢未滿にても一錢及び五錢の切符を以て預る、預け入れ方法は最初預け人は同銀行に至りて名印帳に住所姓名を記載し調印して通帳を受取り、爾來は預金と共に之を持行くなり、又預金の受戻をなさんとするには、通帳及び印形を同銀行に持行き手續きをなして請取るべし、

預金の利子は年五分四毛即ち十圓を預くれは一ヶ年五十錢四厘一ヶ月四錢二厘の利子を生する割合さす、而して此利子は毎年兩度六月三十日及ひ十二月三十一日に計算して元金へ加算するなり、又預金は毎月十五日以前のものは下半月より利子を付し、下半月のものは翌月一日より利付さなるべし、

今之が預金の元利積算を表すれば

貯蓄預金元利積算表（年五分四毛にて毎年六月十二月に利子を元金に加上）

年次	毎日一錢ヅヽ預く	毎日十錢ヅヽ預く	毎月一圓ヅヽ預く	一度百圓預け置く
初年	三、六八三円	三六、八三二円	一二、二七七圓	一〇五、〇九〇圓
五年	二〇、三五八	二〇三、九一一	六七、八六〇	一二八、一二三
十年	四六、四六一	四六五、四五一	一五四、八七二	一六四、二三四
十五年	七九、九五〇	八〇〇、八九九	二六六、五〇三	二一〇、五〇二
二十年	一二二、八九七	一二三一、一四一	四〇九、六五八	二六九、八四八
廿五年	一七七、九七八	一七八二、九五六	五九三、二六〇	三四五、九七七
三十年	二四八、六一七	二四九〇、七二六	八二八、七二四	四四三、五七六
四十年	四五五、四四一	四五六二、七六九	一五一八、一三七	七二九、三一九
五十年	七九五、六八三	七九七一、三三六	二六五二、二七八	一一九九、三七五

東京貯藏銀行

東京貯藏銀行は池田謙三氏頭取高田小次郎氏取締役さして成立ち居るもの、明治十三年六月の開業にて、日本貯蓄銀行の最も先に出來しものなり、所在は日本橋蠣町十一番地、

今之が預金規則の一二を抄すれば、

預け金高は一錢以上何程にても、

利子は年四分八厘の割合にて毎年一月七月の兩度元金に組込むべし、

預金は毎月五日までのものは其月より利子を付し、其後のものは翌月より利子を付す、去れさ一圓未滿の端金及び一ヶ月を經さる預金には之を付せざるなり、

十錢以下は郵便切手證券印紙を金錢に代用して之を預る、

而して商家の傭人等にて獨立する時に引出すべきものには特別に年利五分四厘にて預り、學校病院其他の共有金は年利五分にて預るべし、

預金をなさんとする人はまづ同銀行に行き、其名刺帳に宿所姓名族籍年齡を記入し且調印し、通帳を受取るべし、

預金を引出さんとする人は通帳及び印形を持行くべし

若し代人を出さは通帳及び委任狀を持ち行かしむるを要す、

此等諸銀行の預金に關する詳細なる手續きは其規則書を取り寄せて見るべし、

あれ御覧！ よそのをぢさんが 倚子を つぶしてツ



（威張りたる紳士）

播かぬ種は生へぬ、
稼ぐに追付く貧乏なし、

時事一斑

事あらば早く成すべし

事あらば早く成すべし、業あらば早く卒ふべし、少壯努力せずんば老大徒に傷悲せん。吾人は今こゝに樂しき春を待たんと欲して、豫め讀者に其秋節を思はんことを勸告する者なり。春風也是多二情思一。

文部施政の障碍者

見るべし文部の新學政に反對する者は如何なる部分にまであるかを。文部省は内訓しぬ、『敎育の公務に從事する者が、猥に文部省學政の施行に障礙を生すべき演說若くは敍述をなすよしなれば嚴重に之を取締るべし』と。

姦通問題

曩日横井たま子外三百三十八名より衆議院に呈せし姦通問題に關する刑法改正請願は、委員會に於て院議に附せざる事となせしに、議員中左の要求をなしたるものあり。

夫れ天賦人權の重んずべき誰か之を非議せん而して我刑法第三百五十三條の如きは實に女子の人權を蹂躙したるものと云はざるを得ず是れ横井タマ外三百卅八人が本院に向つて此請願書を呈出したる所以なり抑我衆議院は人民權利の擁護者を以て自任するものなれば事苟も人民の權利に關するものあれば宜しく審査熟議をなし以て其分を盡すべきなり然るに我請願委員は本件を以て院議に付すべきの價値なきものと認定し同委員長は其決議を議會に報告せられたり然れども本員等は敢て其議に服從する能はず本件は採擇すべきものと認む因て議院法第六十四條に依り本件を院議に付すべきを要求す

明治廿六年一月

要求者

野口褧　千葉禎太郎　小西甚之助　津田眞道
瀨戶岡爲一郎　江原素六　立石寛司　加藤淳造
河島醇　關戶覺藏　原善三郎　石坂昌孝
永井松右衞門　浮田桂造　古莊嘉門　高梨正助
波多野傳三郎　靑山朗　愛澤寧堅　小笠原貞信
嘉悅信之　鈴木重遠　金井貢　吉岡倭文麿
武市安哉　齋藤勘七　佐野助作　丹後直平
森東一郎　杉村寛正　横井善三郎

衆議院議長　星亨殿

行樂

袖ひちてむすびし水のこほれるを、春立かへるやさしき風に端りなく吹きとかれ、池の面は輕く皺みて春の初花を打出しける。世は麗かなる時節に向へり。行樂の神はやがて野邊に

掛茶屋を出して人を招くめる。青帝の先驅は早や梅梢南向きの所に到着して漸く淑氣を吐かんずなりぬ。古に花看ニ半開一酒飲ニ微醉一となん云へり。佳趣の



爛漫たる日にあらぬことは固よりなるのみならず、最も高致あるは五點三點の初花に在り。寧ろ春に先て殘霜に逢ふも滔々たる儕輩と艷陽を趁ふて芬芳を鬪はさゝるは魁春の友は志士の酷愛する所なり。去て看たまへ、將に爾が訪ふを待たんとす。

江東の春色は臥龍梅、龜戸天神より三四町なり。幾園の梅屋敷、老枝槎枒横さまにすね、千年の苦芳あり。更に北の方三四町に小村井の江東梅あり、古色なしと雖花樹多し。一園の假山亦好趣致。

木下川梅園は且つ大に且つ廣、江東梅より東五六町を去るべし。

最も清閑なるは小梅村梅林あり、一掬の禪味澁茶一碗。」

向島の百花園は白鬚神社より東一町許の所に在り。名にし負ふ壽星梅、枯枝に星の香がする花一つ。

内藤新宿の角筈銀世界韻致の高きと賞すべし。

蒲田の梅園は新橋西に去て大森より數町を隔つ、名高き梅園にして園中小料理店もあり、最も遠足などによろし。

大森八陣、ステーションの傍なり、山上廣し。一隊の行樂軍據て以て假戰を試むべし。

請地村の東花園、往時奥州街道にありたる二老樹移して在り。是れ徳川有德將軍が遺愛の花。

芝公園の丸山、九段坂上の靖國社、亦梅樹多し。

若し遠く春を覓んと思はゞ小向井の梅園可なり、川崎ステーションより一里餘。杉田、原村、目黒、白山、今一々數へず。ア、江都梅花なきを憂へざるなり。去り去て遊んと欲する所に遊べ、東郊西郊爾を拒まざるべし。敢て讀者に傳語す、頃者青帝檄を吾人に移して曰へり『本月下旬より其御地の梅屋敷に出張可ㇾ仕候』と。



想ふに堪たり、朝まだき手折る袂に露落ちて匂ひも濡るゝ梅の木の下に逍遥する樂。さして行く方もなけれど香にめでゝ梅咲く野邊に遠く來にける散策の頰を撲つ風軟かに、砂を鑽る寸々總て春心なり。樹下に立つ小貴女はあどけなき聲を揚げて斯くなん歌ふめる、

松の木蔭に立寄れば、
千歳の翠ぞ身にはしむ。
梅が枝かざしにさつれば、
春の雪こそ降りかゝれ。

又本月廿五六日頃よりは日本橋十軒店邊に見るべきもの、そは



救世事業一斑

東京感化院

東京感化院は明治十八年十月の創立にて佛蘭西「メットライ」感化院の制度に摸擬したるもの、爾來八年實驗を重れ廿二年以役は純然たる親愛主義の家族法を組立て入院生は悉く院長の子弟さし、教職役員之が幾兄の資格にて一家族の關係を以て事に開發薰陶に從へり、院長高瀨眞卿氏の言に感化上の最も困難なるは入院者の性質、嗜欲、習慣及び心意の如何を知り人相を觀察するに在ることさながら之を誤認せざる以上は十中の七八は改化せざるなしさ、

克化殿　同院内は庶務出納の事務室應接所等世間普通の躰なるが別に克化殿さ稱する修身教場あり、最も嚴整に裝ひ、幀内に感化教の祖神を祭り、其前を十八疊敷の一間さし、之れを中堂さ云ひ、昇等式入院式賞罰の宣言每月の例祭及び每週二回の教誨をなす所さす、家族（生徒さ呼ば

す）の此席へ出る者は必す袴を着し、役員式場に臨む者は黑の式袍を着す、

家族舘　は同院生徒の寄宿舍なり、雜居の家族を三分し之を各々二室つゝに分ち總て六室、外に分房十室あり、家族室は一室五六人、分房は一人または二人つゝを入れ其中に、長子と名け年長者一人ありて室内の事を周旋す、何れの室にも夜具戸棚外に押入あり、掛物生花などを懸け、一人毎に机硯箱手箱あり　書物函を置くもあり、一室毎に大火鉢を置き、燈火は一室に一つまた二個を置く、食事の時は室内へ薄縁を敷き其上へ食机を置き六七人宛相對して食す、掃除等各室にて之をなし極めて清潔なり、分房の獨居者は各火鉢等あり、机手函など皆な之を所有す、父兄の肖像畫或は山水などの額を掛たるもあり、掛物をかけ香など焚くもあり、

主教部　主教部は感化教の本部にて院長常にありて教職を會し賞罰取締教授方法等を議定す、家族を一人つゝ呼出して院長之に種々の談話をなし、或は教誨を加ふる事あり、或は切に將來の方向を指示する事あり、他の役人をして少しも知らしめず院長と家族と親密に談話する事あり、

教授所　は普通學科及び漢學文學等を授くる處にして、普通科の教員二人、漢學科一人、文學科一人之を教授す、朝八時より午後三時に畢る、教授の方法等世間に異なる事なし、家族將來の方法に必要なる時は定則の教授の外、英學數學等を授く、

視察所　家族舘の中央に視察の役員一人詰合ふ、分房の中央に見張所ありて同しく視察一人あり、晝夜とも互に巡視し家族の擧止に注意し、細大となく手帳に記して之を主教部へ出す、此の所に視察員四人、一晝夜二人つゝにて交番す、深夜と雖も一人宛必す不寐番を勸め火の元非常の事を警む、

攻業所　家族中依頼主の望によりまたは本院にて給養する者をして活版の業を習はしむ、目今印版の彫刻、足袋職等に從事する者あり、また油畫を修業する者もあり、

家族の等級　新たに入院する者あれば院長直ちに之に面會し教誨する處あり、一週間のうち入院の式を行ふ、この式は必す夜中執行す、院長教部二人各々黑の式袍を着し、視察一人各室の長子制服にて列座、院長告文を奏し入院者誓文を讀み、神酒を賜はり十二等生となる、是より追々昇級して十等生となれば小遣錢を與へらる、其より等の進むに隨つて小遣錢を增し七等生に至れは小遣錢三十錢羽織を着用する事を得るなり、七等以上を待過生と呼ぶ、一等生に至れは小遣は增て六十錢となり、初めて改良生の資格を以て退院する事を得、

修身教誨　毎週二回三回位つゝ克化殿に全家族を會し、修身の教誨をなす、此教誨の講師は院長及教部（教職の重立たる者を教部と云數年院務に從事し學問實驗二つながら備へたる者之れに任す）に限る、其他の役員は學問の教授をなす者と雖も克化殿の教誨をなす事を得す、さて午後一時招呼の太鼓を相圖に當番の視察一人家族一同を率ひて着座せしむ、待過生は羽織袴、其他は袴のみ着す、講師は黑色の式袍に同色の式幘を冠りて講話す、

賞罰　品行の調査と學科試驗の點數とを合せ賞罰の案をたて、教部視察を主教部に會し評議す、賞の重きを感狀とす、次は賞狀、家族中感狀を持ち居るものは大に榮譽とす、賞狀もまた一ヶ年二回も得たる者は幾宋に於て必す特別の賞に預り不時の拔擢を蒙る事あり、罰則は謹愼室に靜座せしむるを重しとす、幼年者は視察所に整立せしむ、月末に呵責せらるれば同族の者大に之を輕蔑して同族の顏を汚したりとて三四日間言語を交へず、また同室より犯則者出つれば長子の首尾もよからす、

役付　家族室に各々長子と云者あり家族中の年長者にて能く室内の世話をなすべき器量を撰みて命ぜらる、一人の長子にて九人十人の世話をなす者あり、掃除の指揮食事の節の心掛夜具のあげ下しみな長子の預る處なり、故に長子たるものは名譽として之を望むか多し、長子は毎月一度院長宅に於て慰勞の茶菓を饗せらるまた臨時待遇を受くる事あり

感化號　入院生は實名を稱する事を禁し入院の當日感化號を與ふ、名字の一字を取り之に號を加ふ、例へは加藤清正なれば之に忠敬と云ふ號を與ひて藤忠敬とよぶ、入院生互に其の名を知らしめす、且つ入院前の事情を院內にて話すを禁し、本籍父母の名等亦仝し、

席次　家族の席次は等級に從ふ、

氣風　家族一般の氣風は、穩かなる方なり院長役員の命令は如何なる事にても當座に之を拒むと云事なし、役員に逢ば必ず立禮をなす、克化殿にては平伏して敬意を表す、朝の起床夜の就床室内に座して役員の來るを俟ち互に挨拶をのぶ、食事の節入浴の時みな多少作法を守りて會釋せざるものなし、

小遣錢使用　家族の十等以上の者は毎日曜日に自己の小遣錢を以て紙筆墨諸雜誌繪双紙菓子果物その他制限内の戯遊品何にても購入する事を得せしむ、小遣錢五十錢以上の者は其半を貯金せしむ、自己にて足袋手拭等を購ふ者もあり、

文庫　文庫には和漢の歴史類軍小說物語等を藏し、毎週家族に貸し自室に於て閱覽せしむ、

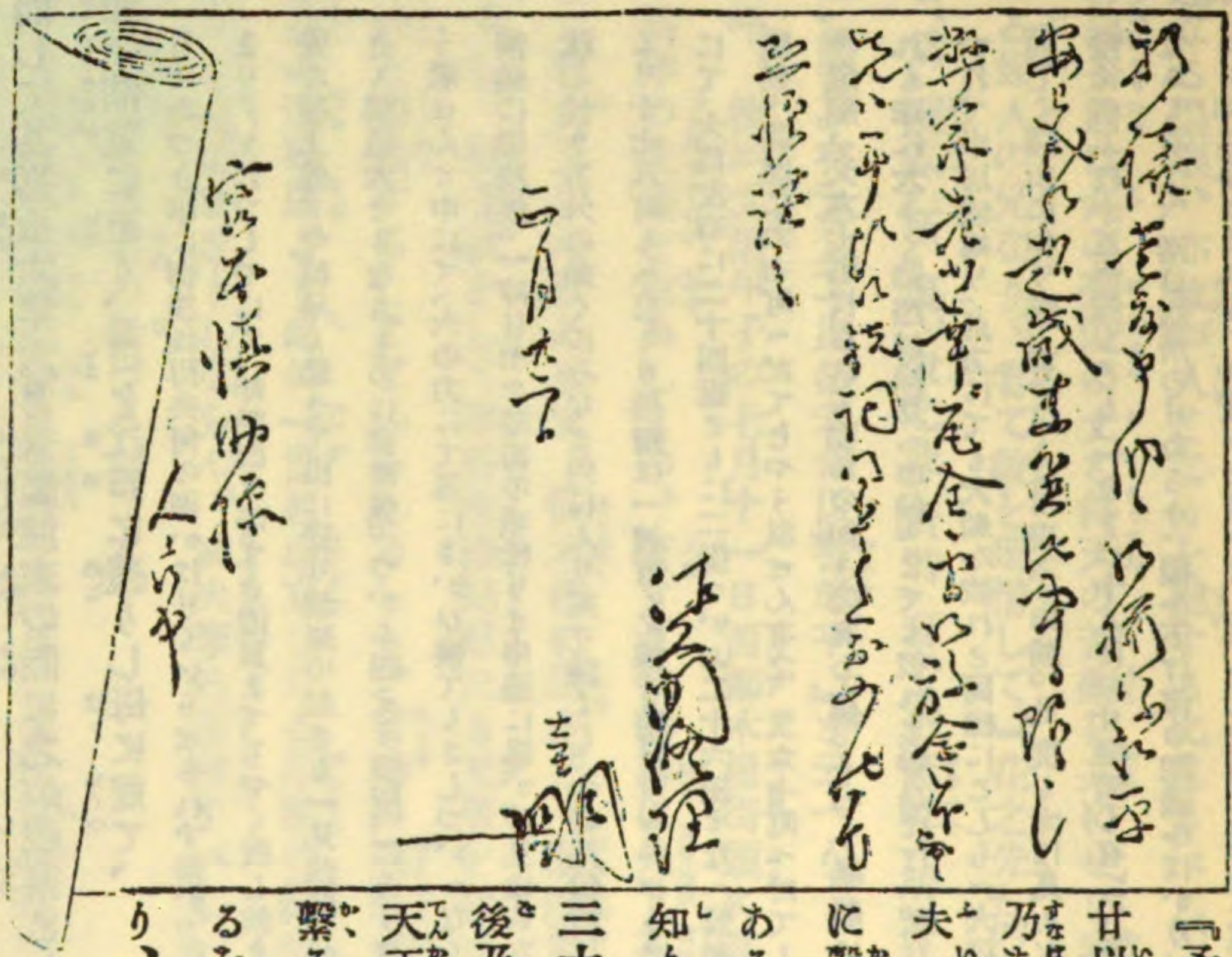
談會　は教授所に於て開くを稽古の會とし、克化殿に於てするを正式の會とす、常に出席者廿四五名幼年家族より出る者四五名なり、會主は院長、題はすべて當座に出す一席に二題三題位、題出れば直ちに發聲して披露をなす、優等なるには賞を與ふ、

改良の成績　入院生十人に對して五人は必す改良せしむべき見込なりと入院後生質の調査不良の原因の研究等に三四ヶ月を要す、改良すべき見込ありや否やと定むるは少くも六ヶ月を要すべし、改良の見込なしと認定するも、依頼主より强て在院を望まるれば永き歳月の間に改良の端緒を發見する事もやと之を諾する事あり、見込の已に立たるは二年ほどにて改良生として出院せしむる事を得、いかに永くも五年以上在院せしむる事はあらず、又愚鈍白痴は入院を許さす

改良の効の年齡に關係する事頗る著大なり、十三四才以下の者は十人の七八改良の効あり、其以上に至ては十中の五、廿才以上に至ては十中の三四位に過きす、

佐久間象山

停春樓主人



『予年廿以後乃ち匹夫一國に繫るあるを知り、三十以後乃ち天下に繫るあるを知り、四十以後乃ち五世界に繫るあるを知る』とは、近時の豪俊佐久間象山が喝破したる語にあらずや。亦以て彼が世界の人を以て自ら居り、傲然として一世を睥睨するの概ありたるを見るべし。

此くの如く彼は好んで威嚴を盛にし、堂々として頗る覇氣を吐きしと雖、家庭に於ける佐久間象山は決して然く恐ろしきものにてはあらざりしなり。

彼嘗て其門人吉田松陰が國禁を犯して密に海外に航せんとするの謀を助け、爲に連坐して獄に下りしが、彼は偶一聲の子規雲を破て過ぐるを聞き詠して曰く、

遠地近地に鳴くほとゝぎす人ならば、
　　母のみことに言つてましを。

ほとゝぎすなのる夜ころは、五月雨の
　　降らねど袖に露ぞこぼるゝ。

彼が母に對する愛情の如何に濃かなりしかは想像し得て餘りあるべし。

而して其嘉永六年六月米艦渡來の際に之が視察として相州浦賀に至り、書を江戸に殘りし母に贈て、

日々あつき事に御座候得共何の御かはりもいらせられず候か。私事あまり〳〵たつしやにて、昨晩四ッ時すぎ浦賀まてちやく致し候まゝ御安心願上候。今朝早く起きて山に登り渡來の船さも一見候所、かれてきゝ候通大そうなるものに御座候。つかふ四そうの所、二そうはじやう氣せんさ申にて、火の力にて風にさかひ候てもさしつかへなく走り候船に御座候。一昨日七ッ時前の頃松りさ申邊に帆かけ見ゆるなさ沙汰し候うち矢の如くにみなさ内に入り來り候よし。今朝見候所はくかより十七八町もへたゝり候所に一艘有レ之候。是は コルヘット さ申船にて、大筒左右に二十四挺さもに二挺つかふ二十六挺そなへ候船に御座候。其並に六七町へだてじやう氣せん有之、又六七町へだてゝじやう氣船、又六七町はなれて初めの如き船有レ之候。じやう氣船はいつれも殊に大きく御座候樣見へ申候。さても彼れさ爭ひには、私などのかれて申居候通り、此方にても大船を彼れさ同樣にこしらへ大筒をも同しく澤山に作り候上ならでは出來不レ申候。此度も大に見あなどり候て小ふれ十五六艘おろし、一そうに十人はかり乘候も有レ之、五六人なるも有レ之、港口諸所のりあるき、綱を下げ海の深淺をはかり、あまつさへ浦賀の燈明臺さ申邊へ上陸いたし悠々見物致し候ては、傍若無人の樣子さ申事に御座候。しかるを奉行はじめおそれられ候か與力同心もこわかり候か夫か上の御趣意に候か誰一人さかめ候ものもなく、唯見ぬふりなしてさし置候さの事、切々遺憾無二此上一事に御座候。一昨日四艘參り候か、尙跡四艘參り候はんさ申事に候よし。先至て穩なる取あつかひに候へは此度は何事も有之ましく候。此表御用船の外一切船留さ申事に候か、其内さしつかへ出來可レ申候。公邊の御あいさつも早速には濟申ましく、いつれ盆前に方つき候へはよろしなさ此土地のものも申居候。私も又出候さも此度は一兩日中罷歸り候心得に御座候。乍去今少しせんさく仕度事有レ之候間、大凡わかり候事さも認め御屋敷へ差出し候、爲め附人の内一人さし戾し候まゝ、大略の事御きかせ申上候。めてたくかしく。六月五日。

御母上樣

と云へるを見るに、彼が母は亦決して尋常平凡の婦人にてはあらざりしならん。然らざれば何ぞ其書の婦女子に與ふるものに似ずして、憂國の士に送るものに似たる所あるや。諄々說き去るの間に、生平相語て相會意するの口氣自ら察せらる。

古來非凡の士は多く非凡の母を有せり、彼が如き非凡の見を生みたる母は必ず尋常の婦人にてはあらざらん。

前に揭ぐるは則ち象山が手筆にして、其嘉永五月正月

人に送りたる年賀狀なり。以下附言して雨宮生なるものゝ爲に其結婚及び負債に關する事を斡旋なしぬ。遒達なる墨痕、亦彼が人となりを推するに足るべし。

勝海舟翁は此の豪俊の士と終天の苦樂を共にせし幸福なる婦人の兄なり。嘗て彼を追惜して、『花之先ニ於春一者、爲ニ殘霜一所レ傷。説之先ニ於時一者、爲ニ舊弊一所レ厄。雖レ然不レ有ニ先者一、則後者何以警起乎。』と云へり。

嗚呼、彼が元治甲子の七月十一日西都木屋街頭に其五十四年の生涯を收めしもの、要するに其春に先て花さきしに由らずんばあらず。喬木固に風多し、豪俊固に敵多し。縱令彼をして革鞍環鐙昂然たる意氣を載せて危境を縱横することなからしめしも、當時の激揚せる盲目の波は固より此の一世に卓立したる岸頭の喬樹を拍つと遲疑せざりしならん。丈夫寧ろ玉碎すべし、瓦全は志氣ある者の耻づる所なり。

而して彼は木屋町の變に先つ十餘日、其姪和田某の母北山氏に復書して言へらく、

此方心はいの事も候はんど、さつしの通に候。され乍ら人のしんはいをなし候事はさして心配も致し申さず、人の心つかぬ所にしんはいの多く候にはこまり入候。此方の宅へ切込み申すべきの、外へ出候せつ手むかひ候はんのと申事は、諸方書付けにも致とはり札など致し候よしに度々承り候へども、此方何とも存じ申さず、いつも馬にて出候節は西洋くらにて候（當時彼が西洋鞍は世の一問題にして、其日本制のものを措き西洋制のものを用ひしより頑固守舊の輩は頗る之を惡みしなり。故に言是に及ぶ）。悌二郎（男）は出候度は日本の馬具にて候へども、此方は上京後つゐ一度もこちらのは用ひ申さず。其事もかれこれ申す馬鹿ものも候よしに候へども、よき事を聞かぬ樣の事にては成り申さず候故、わざと夫ばかり用ひ申候。色々手むかひ申すへき樣申候も、此方の申條を是迄より別に致し、無法の輩にても手始め致候樣、改めさせ度事と見へ候へども、此方の論は感應院樣（彼が先主眞田侯）御さかんの頃より三十年近く一すぢをまもり居候事にて、今始り候事にてはなく候。日本國中を末長くはかり候見込故に、其見込を改め候樣の事には成り申さず。卅年も其事に骨を折り九年の御とがめを受け候ても其せつを替へ申さず。おそれ乍ら天皇樣の御爲をも公方の御爲をも深く存し上候ての事にて候。其事は志のあるものは大ていは皆知る所に候故、色々申候もの有レ之候ても、天道と申ものも有レ之候得ば、先は此方へ手むかひ致し候事はあるまじく安心致し居候。もしく此

方の身にわさわひにてしかけ候事有レ之候はゞ、日本はもはや大らんと存し申べく候。甚ぶんに過き候事を申様に候へとも當節の議論日本國中の命脈は此方に有レ之と存じ候。この御國と存亡を共に致し候れうけん故に、人々いろ／＼申候てもさらにおそれ候事なく、心中いつもやすらかに存じ候。是はこれまでのしゆげふの功と存し申べく候。

そ。蓋し彼は身を以て國家の安危に任じ、自ら其信ずる所を決行して毫も懼るゝ所なかりしなり。嗚呼、象山の如き者眞に大丈夫と謂ふべき夫。世の國を憂ふる者は誰も斯くあらまほしくこそ。



社告

家庭雜誌第五號には新年大附錄あり

新島先生の書畫あり

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行